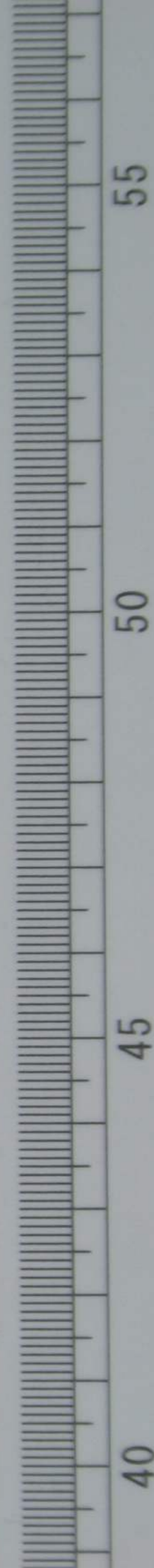


現代名作選集
獨步篇



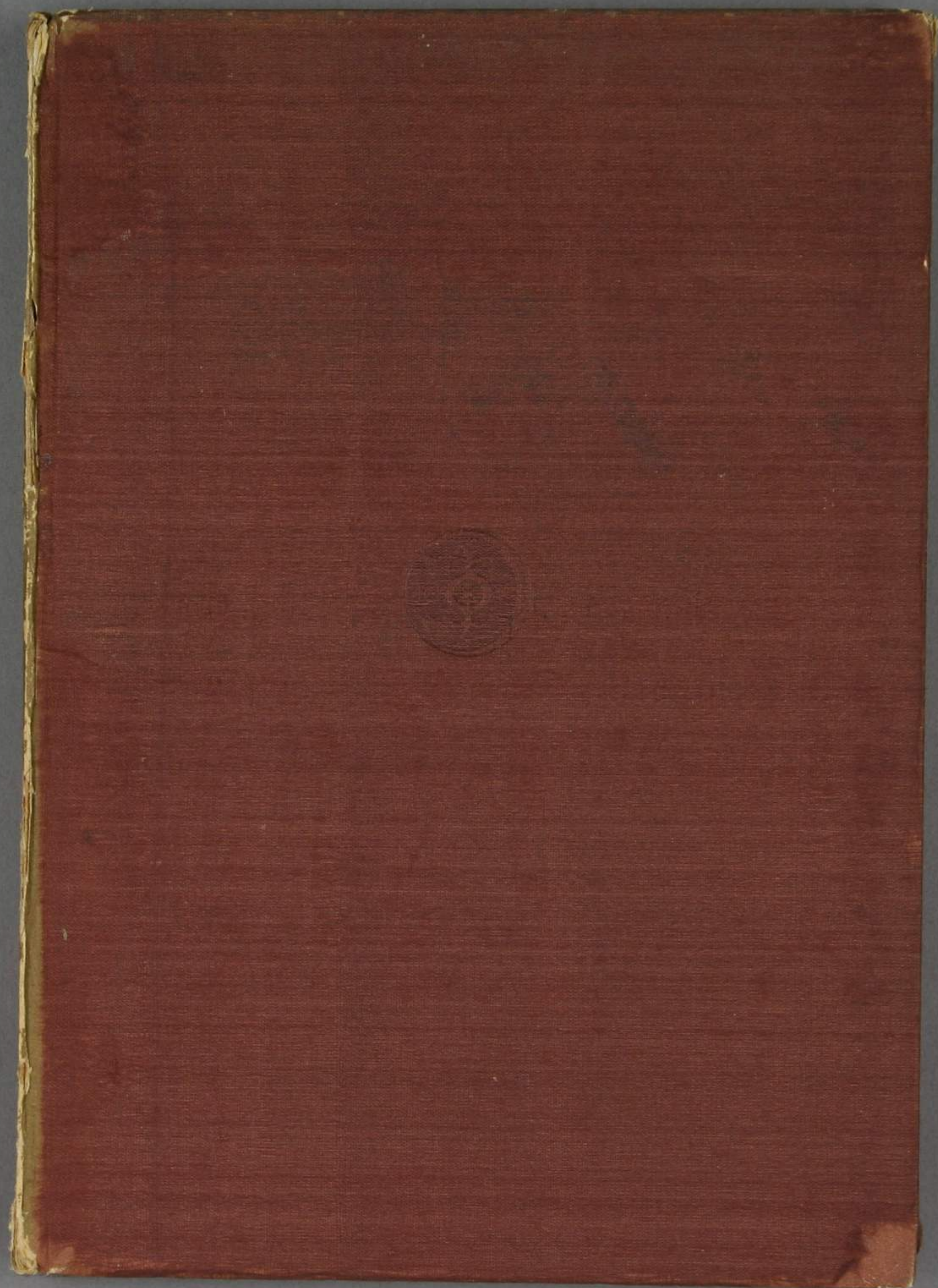


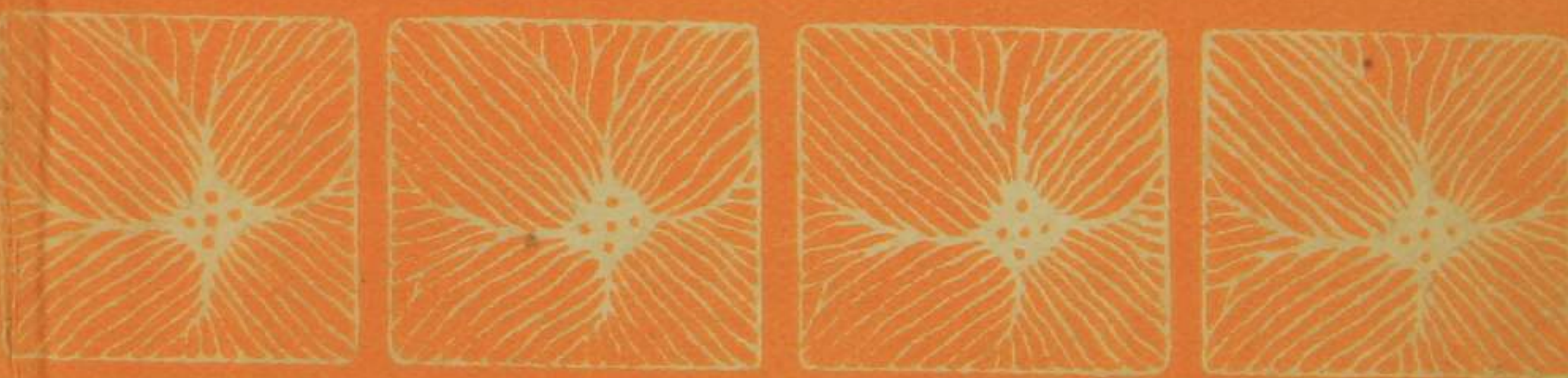
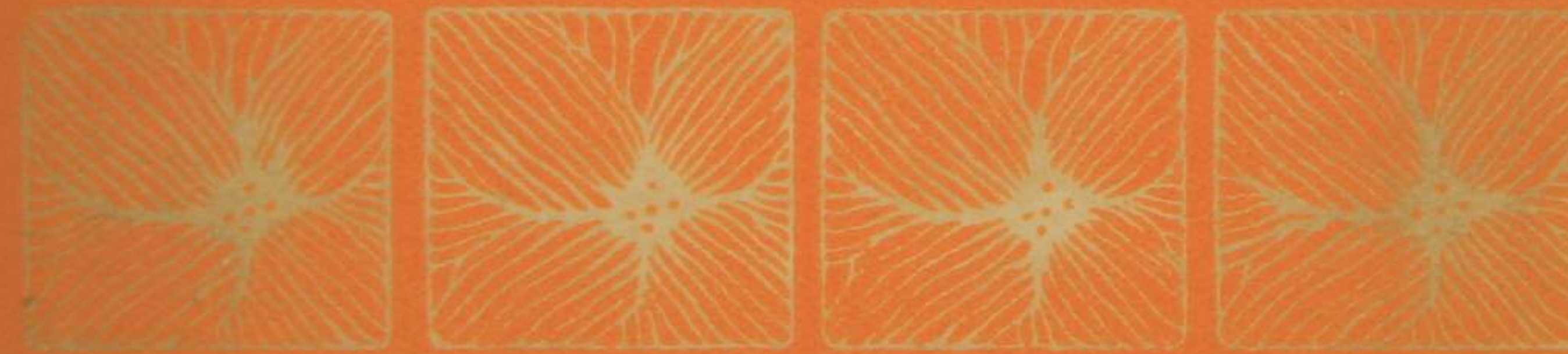
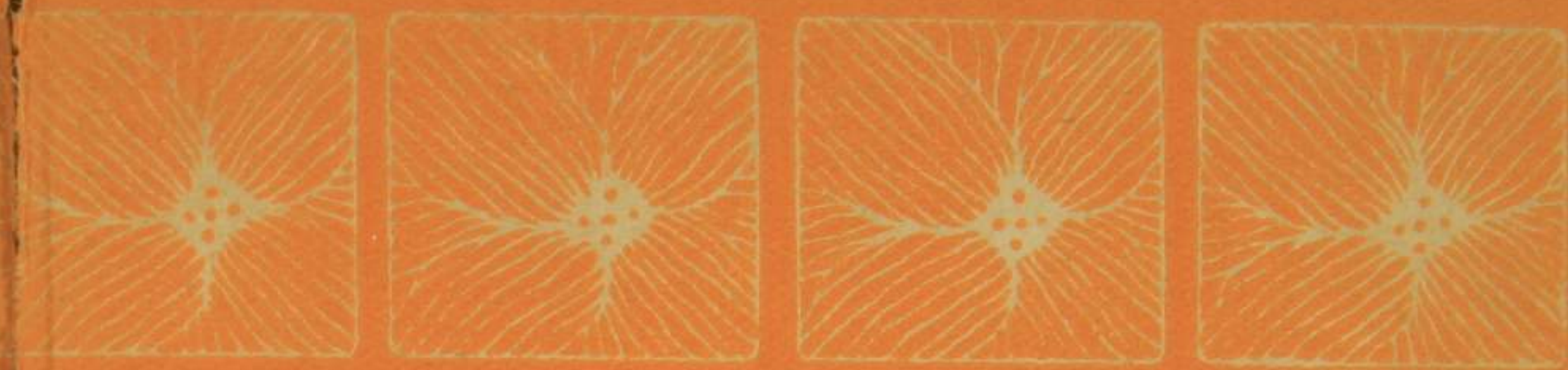
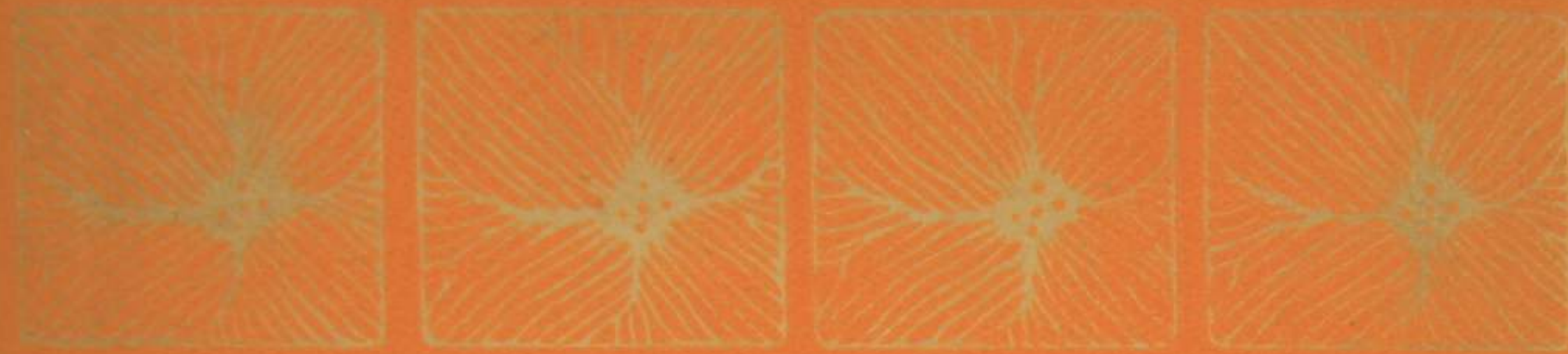
牛肉と馬鈴薯

獨步



代表的名作選集 一





■ 代表的な名作選集

(1)

東京
新潮社
出版

牛肉と馬鈴薯

國木田獨步作

代表的名作選集序

明治に新文藝興りて漸く三十年、而も能く西歐の文藝が二三世紀に亘りて踏めるの道程を盡くせり。其間、幾變遷幾曲折して、おのづから時代を劃し、その時代を飾るの名家と名篇と、例へば春花の春風に開落して代謝に際なきの觀あり。今、紅葉露伴時代以降における近代的文藝の勃興當時より最近文壇に亘りて、其の代表的作家を選び、其の代表的作品を求めて、茲に本集を編す。實に是れ我が近代文藝の精英にして不朽の名作のみ也。希くは新文藝の勃興を紀念し、よく之を後昆に傳ふことを得ん歟。あらゆる文學の書の冠冕として、文學に志ある人々の愛讀を待つこと切也。

大正三年十一月

解題

『牛肉と馬鈴薯』は、明治三十八年に公にした彼の第一短篇集『獨歩集』に收められたもので、彼の特色傾向を最もよく現はしてゐる。彼が後年『自然主義と余』といふ一論文に於て、「悠久にして不思議なる生死を吞吐する此の大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此の大自然、事實中の大事實、當面の眞現象に就いては何等の感想をも懐かない文人が、如何に巧に人間の事實を直寫したからとて夫は一藝當たるに過ぎ無い。斯くて文藝何の値ぞ、所謂自然主義何の値ぞ。」と云つてゐるのは、此一篇を裏附くところの彼の人生觀、藝術觀である。

『運命論者』は其の翌々年公にした第二短篇集『運命』に收められたもので彼の運命觀を具象してゐる。

『女難』は『牛肉と馬鈴薯』と共に、『獨歩集』に收められたもので、我が文壇に於ける最初の肉慾小説として、自然主義者としての此の作者の面目を最もよく發揮したもの

である。

是等の作品はあまりに時勢に先じたが爲に發表の當時に於ては、世の注目を牽かなかつた。『運命論者』の如きは、どの雑誌からも掲載を斷られ、作者をして、「運命論者の運命拙く」と慨かした事もあつたのである。

『欺かざるの記』は作者の青年時代の日記で、本書に收めたものは、その戀愛事件に關する部分である。感情的な、而して浪漫的な彼の戀が、いかに熱烈にして且つ調子の高いものであつたらうか。而して、その戀の破れがいかに彼の性格に影響し、延いてはいかに彼の藝術に影響したらうか。兎に角、此の作者をして、自然主義に適かした原因の大なる一つが、この事件であつた事は争はれない。

編者記

牛肉と馬鈴薯 外數編

國木田獨歩作

目次

牛肉と馬鈴薯…………… 1
運命論者…………… 1
女 難…………… 1
欺かざるの記…………… 1

牛肉と馬鈴薯

明治俱樂部として芝區櫻田本郷町のお塚端に西洋作の餘り立派ではないが、それでも可なりたゞの建物があつた。建物は今でもある。しかし持主が代つて、今では明治俱樂部其者はなくなつて了つた。

この俱樂部が未だ繁昌して居た頃のことである。或年の冬の夜、珍らしくも二階の食堂に燈火が點いて居て、時々高く笑ふ聲が外面に漏れて居た。元來この俱樂部は夜分人の集つて居ることは少ないので、ストーブの煙は平常も晝間ばかり立ちのぼつて居るのである。然るに八時は先刻打つても人々は未だなか／＼散じさうな様子も見えない。人力車が六臺玄關の横に並んで居たが、車夫どもは皆な勝手の方で例の一六勝負最中らしい。すると一人の男、外套の襟を立て、中折帽を面深に被つたのが、眞暗な中からひよつくり現はれて、いきなり手荒く呼鈴を押した。

内から戸が開くと

『竹内君は来てお出ですかね』と低い聲の沈重いた調子で訊ねた。

『ハアお出で御座います、貴方は？』と片眼の細顔の、和服を着た受付が丁寧に言つた。『これを』

と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり、何の肩書もない。受付は其を受

取り、急いで二階に上つて去つたが、間もなく降りて来て、

『どうぞ此方へ』と案内した、導かれて二階へ上ると、煖爐を熾に燃いて居たのど、ムツとする程温かい。煖爐の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に倚つて居る。傍の卓子テーブルにウキスキーの壘が載つて居て、こつぶの飲み干したるもあり、注いだまゝのももあり、人は可い加減に酒が廻はつて居たのである。

岡本の姿を見るや竹内は起つて、元氣よく、

『まア之れへ掛け給へ』と一の椅子をすゝめた。

岡本は容易に座に着かない。見廻すと其中の五人は兼て一面識位はある人であるが、一人、色の白い中肉の品の可い紳士は未だ見識らぬ人である。竹内はそれと氣がつき、

『ウン貴方は未だ此方を御存知ないだらう、紹介させよう、此方は上村君と言つて北海道炭礦會社の社員の方です、上村君、此方は僕の極く舊い朋友で岡本君……』と未だ言ひ了らぬに上村と呼ばれし紳士は快活な調子で、

『ヤ、初めて……お書きになつた物は常に拜見して居ますので……今後御懇意に……』

岡本は唯だ『どうかお心易く』と言つたぎり黙つて了つた。そして椅子に倚つた。

『サア其先を……』と綿貫といふ脊の低い、眞黒の頬髯を生して居る紳士が言つた。

「さうだ！、上村君、それから？」と井山といふ眼のしよぼくした頭髪の薄い、瘦方の紳士が促した。

「イヤ岡本君が見えたから急に行りにくくなつた。ハ、、、」と炭礦會社の紳士は少し羞はにかんだやうな笑方をした。

「何ですか？」

岡本は竹内に問うた。

「イヤ至極面白んだ。何かの話の具合で我々の人生觀を話すことになつてね、まあ聽いて居給へ。名論卓説、滾々として盡きずだから。」

「ナニ最早大概吐き盡くしたんですよ。貴方は我々俗物黨と違つて眞物ほんものなんだから、幸ひ貴方のを聞きませう、ね諸君！」

と上村は逃げかけた。

「いけない、先づ君の説を終へ給へ！」

「是非承はりたいものです」と岡本はウキスキーを一杯、下にも置かないで飲み干した。

「僕のは岡本君の説とは恐らく正反對だらうと思ふんでね。要之、理想と實際は一致しない。到底一致しない……」

「ヒヤ〜」と井山が調子を取つた。

「果して一致しないとならば、理想に従ふよりも實際に服するのが僕の理想だといふのです」

「ただそれだけですか」と岡本は第二の杯を手にして唸るやうに言つた。

「だつてねエ、理想は喰べられませんか！」と言つた上村の顔は兎のやうであつた。

「ハハ、、、ピフテキぢあアあるまいし！」と竹内は大口を開いて笑つた。

「否ピフテキです。實際はピフテキです。スチューです」

「オムレツかね！」と今まで黙つて半分眠りかけて居た、眞紅な顔をして居る松木、座中で一番年の若さうな紳士が眞面目で言つた。

「ハツ、、、」と一座が噴飯ふまでした。

「イヤ笑ひごとぢやアないよ」と上村は少し躍起になつて、

「例へて見ればそんなもんで、理想に従へば芋ばかり喰つて居なきアならない。ことによると馬鈴薯も喰へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯と何ちが可い？」

「牛肉が可いねエ！」と松木は又た眠むさうな聲で眞面目に言つた。

「然しピフテキに馬鈴薯は附屬物だよ」と頬髯の紳士が得意らしく言つた。

「さうですとも！理想は則ち實際の附屬物なんだ！馬鈴薯も全きり無いと困る。しかし馬鈴薯ばかりぢやア全く閉口する！」

と言つて、上村はやゝ満足したらしく岡本の顔を見た。

「だつて北海道は馬鈴薯が名物だつて言ふぢやアありませんか？」と、岡本は平氣で訊ねた。

「其の馬鈴薯なんです、僕はその馬鈴薯には散々酷い目に遭つたんです。ね、竹内君は御存知ですが僕は斯う見えても同志社の舊い卒業生なんて、矢張その頃は熱心なアーメンの仲間、言ひ換へれば大々的馬鈴薯黨だつたんです！」

「君が？」とさも不審さうな顔色で井山がしよぼ／＼眼を見張つた。

「何も不思議は無いサ。其頃はウラ若いんだからね。岡本君はお幾歳かしらんが、僕が同志社を出たのは二十二でした。十三年も昔なんです。それはお目に掛けたいほど熱心なる馬鈴薯黨でしたがね。學校に居る時分から僕は北海道と聞くと、ぞく／＼するほど惚れて居たもんで、清教徒を以て任じて居たのだから堪らない！」

「大變な清教徒だ！」と松木が又た口を入れたのを、上村は一寸と認めて止めて、ウキスキを嘗めながら、

「斷然この汚れたる内地を去つて、北海道自由の天地に投じようと思ひましたね」と言つた時、岡本は凝然と上村の顔を見た。

「そしてやたらに北海道の話聞いて歩いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて來たといふ者があると直ぐ話を聴きに出掛けましたよ。處が又先方は旨いことを話して聞かすんです。やれ自然が何うなの、石狩河は洋々とした流れだの、見渡すかぎり森又た森だの、堪つたもんぢやアない！僕は全然まゐつちまいました。そこで僕は種々と聞きあつめたことを綜合して此如ふうな想像を描いて居たもんだ。……先づ僕が自己の額に汗して森を開き林を倒し、そしてこれに小豆を播く、……」

『その百姓が見たかつたねエ。ハツハツ、』と竹内は笑ひだした。

「イヤ實地行つたのサ。まア待ち給へ、追ひ／＼其處へ行くから……、其内にだん／＼と田園が出來て來る、重に馬鈴薯を作る、馬鈴薯さへ有りやア喰ふに困らん……」

「ソラ馬鈴薯が出た！」と松木は又た口を入れた。

「其處で田園の中央に家がある。構造は極めて粗末だが一見米國風に出來て居る。新英
洲植民時代そのまゝといふ風に出來て居る。屋根が斯う急勾配になつて物々しい煙突が
横の方に一つ。窓を幾個附けたものかと僕は非常に氣を揉んだことがあつたッけ……」

『そして眞個ほんごに其家が出来たのかね』と井山は又しよぼく／＼眼を見張つた。
 『イヤこれは京都に居た時の想像だよ、窓で氣を揉んだのは……さうだ／＼若王寺へ散歩に往つて歸る時だつた！』

『それからどうしました？』と岡本は眞面目で促がした。

『それから北の方へ防風林を一區劃、なるべくは林を多く取つて置くことにしました。それから水の澄み渡つた小川が此防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。無論この川で家鴨や鷺鳥が其紫の羽や眞白ましろな脊を浮べてるんですよ。此川に三寸厚さの一枚板で橋が架かつて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと種々工夫したが矢張り附けないほうが自然だといふんで附けないことに極めました……まア構造はこんなものですが僕の想像はこれで満足しなかつたのだ……先冬まふゆきになると……』

『ちよつとお話の途中ですが、貴方は其の「冬」といふ音にかぶれやアしませんでしたか？』と岡本は訊ねた。

上村は驚いた顔色をして、

『貴方は如何して其れを御存知です。これは面白い！有繋まさか貴方は馬鈴薯黨だ！冬と聞いては全く堪りませんでしたよ。何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてねエーそれは全く堪りませんでしたよ。何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてねエーそれ

に僕は例の熱心なるアーメンでせう。クリスマス萬歳の仲間でせう。クリスマスと來ると何うしても雪がイヤといふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱つらが下つて居ないと嘘のやうでしてねエ。だから僕は北海道の冬といふよりか冬即ち北海道といふ感が有つたのです。北海道の話も聞いても、「冬になると……」斯ういはれると、身體からだが斯うぶる／＼ツとなつたものです。それで例の想像にもです。冬になると雪が全然家を埋めて了ふ。そして夜は窓硝子から赤い火影がチラ／＼と洩れる。折り／＼風がゴーツと吹いて來て林の梢から雪がぱた／＼と墜おちる。牛部屋うしべやでホルスタイン種の牝牛がモーツと唸る！』

『君は詩人だ！』と叫んで床を靴で蹴つたものがある。これは近藤といつて岡本が此部屋に入つて來て後も一言も發しないで、唯だウキスキーと首引くびひきをして居た脊の高い、一癖あるべき顔構つらまへをした男である。

『ねエ岡本君！』と言ひ足した。岡本はたゞ、黙つて首肯うなづいたばかりであつた。

『詩人？さうサ、僕は其頃は詩人サ、「山々霞み入合いりあの」といふグレーのチャーチヤードの翻譯を愛讀して自分で作つて見たものだアね。今日の新體詩人から見ると僕は先輩だアね』

『僕も新體詩なら作つたことがあるよ』と松木は今度は少し乗地のりちになつて言つた。

『ナー＝僕だつて二つ三つ作つたものサ』と井山が負けぬ氣になつて眞面目に言つた。

處が先生僕と比較すると初から伶俐であつたねエ。二月ばかりも辛抱して居たらうか、或日こんな馬鹿氣たことは斷然止さうといふ動議を提出した。其議論は何も自から斯んな思をして隠者になる必要はない。自然と戦ふよりか寧ろ世間と拮闘しようぢやアないか。馬鈴薯よりか牛肉の方が滋養分が多いといふんだ。僕は其時大に反對した。君止すなら止せ。僕は一人でもやると力んだ。すると先生やるなら勝手にやり給へ。君も最少しすると悟るだらう。要するに理想は空想だ。痴人の夢だ。なんて捨臺辭を吐いて直ぐ去つて了つた。取残された僕は力んでは見たものゝ内々心細かつた。それでも小作人の一人二人を相手に其後三月ばかり辛抱したねエ。豪いだらう！」

「馬鹿なんサ！」と近藤が叱るやうに言つた。

「馬鹿？馬鹿たア酷だ！今から見れば大馬鹿サ。然し其時は全く豪かつたよ」

「矢張馬鹿サ。初から君なんかの柄にないんだ。北海道で馬鈴薯ばかり食はうなんていふ柄ぢアないんだ。それを知らないで三月も辛抱するなア馬鹿としか言へない！」

「馬鹿なら馬鹿でもよろしいとして、君のいふ「柄にない」といふことは次第に悟つて來たんだ。難有いことには僕に馬鈴薯の品質が無かつたのだ。其處で夏も過ぎて樂しみにして居た「冬」といふ例の奴が漸次近づいて來た。其露拂が秋、第一秋からして思つたよ」

か感心しなかつたのサ。森とした林の上をバラ／＼と時雨て來る。日の光が何となく薄いやうな氣持がする。話相手はなしサ、食ふものは一粒幾價と言ひさうな米を少しばかりと例の馬の鈴。寝る處は木の皮を壁に代用した掘立小屋」

「それは貴方覺悟の前だつたでせう！」と岡本が口を入れた。

「其處ですよ。理想よりか實際の可いはうが可いといふのは。覺悟はして居たものゝ矢張り餘り感服しませんでしたねエ。第一、それぢやア瘦せますもの」

上村は言つて杯で一寸と口を濕して、

「僕は瘦せようとは思つて居なかつた！」

「ハツハツムムム」と一同笑ひだした。

「そこで僕はつく／＼考へた。成程梶原の奴の言つた通りだ。馬鹿げきつて居る。止さうツといふんで止しちまつたが、あれで彼の冬を過ごしたら僕は死んで居たね」

「其處で如何いふんです、貴方の目下のお説は！」と岡本は嘲るやうな、眞面目な風で言つた。

「だから馬鈴薯には懲々しましたといふんです。何でも今は實際主義で、金が取れて旨いものが喰へて、斯うやつて諸君と燂壇にあたつて酒を飲んで、勝手な熱を吹き合ふ。腹が

減いたら牛肉を食ふ……』

『ヒヤ／＼僕も同説だ。忠君愛國だつてなんだつて牛肉と兩立しないことはない。それが兩立しないといふなら兩立さすことが出来ないんだ。其奴が馬鹿なんだ』と綿貫は大に敦圀いまいいた。

『僕は違ふねエ！』と近藤は叫んだ。そして煖爐を後に椅子へ馬乗うまのりになつた。凄しみい光を帯びた眼で座中を見廻しながら、

『僕は馬鈴薯黨でもない。牛肉黨でもない！上村君なんかは最初、馬鈴薯黨で後に牛肉黨に變節したのだ。即ち薄志弱行だ。要するに諸君は詩人だ。詩人の墮落したのだ。だから無暗と鼻をひく／＼さして牛の焦る臭くさを嗅いで歩く。其醜體みにくつたらない！』

『オイ／＼、他人を惡口する前に先づ自家の所信を吐くべしだ。君は何の墮落なんだ』と上村が切り込んだ。

『墮落？墮落たア高い處から低い處へ落ちたことだらう。僕は幸にして最初から高い處に居ないから其様外見そんなみづとないことはしないんだ！君なんかは主義で馬鈴薯を喰つたのだ。嗜すきで喰つたのぢやアない。だから牛肉に餓ゑたのだ。僕なんかは嗜すきで牛肉を喰ふのだ。だから最初から、餓ゑぬ代りに今だつてがつ／＼しない。……』

『一向要領を得ない！』と上村が叫んだ。近藤は直なちに何ごとをか言ひ出さんと身構みかまをした時、給仕の一人がつか／＼と近藤の傍に來て其耳に附いて何ごとをか囁ささいた。すると、『近藤は、この近藤はシカク寛大なる主人ではない、と言つて呉れ！』と嘖い鳴つた。

『何だ？』と座中の一人が驚いて聞いた。

『ナニ、車夫の野郎、又た博奕ぼくちに敗まけたから少し貸して呉れろと言ふんだ。……要領を得ないア何だ！大に要領を得て居るぢやアないか。君等は牛肉黨なんだ。牛肉主義なんだ。僕のは牛肉が最初から嗜すきなんだ。主義でも、ヘチマでもない！』

『大に賛成ですなア』と靜おちつに沈重おちついた聲で言つた者がある。

『賛成でせう！』と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

『至極賛成ですなア、主義でないと言ふことは至極賛成ですなア、世の中の主義つて甘あまいほど愚おろかなものはない』と岡本は其訝あやえ／＼した眼光を座上に放つた。

『其説を承らう、是非願ねがひたい！』と近藤は其四角な腮ほを突き出した。

『君は何方どちなんです、牛と薯、エ、薯でせう？』と上村は知つた顔に岡本の説を誘うた。

『僕も矢張、牛肉黨に非ず、馬鈴薯黨にあらずですなア。然し近藤君のやうに牛肉が嗜すきとも決つて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌きらひですが、さりとて肉とか

薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません』

『それぢやア何だらう？』と井山が其尤もらしいしよぼく眼をばちつかした。

『何でもないんです。比喻は廢して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならつて俗に和して肉慾を充たして以て我生足れりとすることも出来ないのです、出来ないのです、爲ないのではないので、實をいふと何方でも可いから決めて了つたらと思ふけれど、何といふ因果か、今以て唯つた一つ不思議な願を持って居るから、其ために何方とも得決めないで居ます』

『何だね、其の不思議な願と言ふのは？』と近藤は例の壓しつけるやうな言振で問うた。

『一口には言へない』

『まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう！』

『まづ其様なことです。……實は僕、或少女に懸想したことがあります』と岡本は眞面目で語り出した。

『愉快々々、談愈々佳境に入つて来たぞ、それからツ？』と若い松木は椅子を暖爐の方へ引寄せた。

『少し談が突然ですがね、まづ僕の不思議の願といふのを話すには此邊から初めませう。』

其少女はなか／＼の美人でした』

『ヨウ！ヨウ！』と松木は躍上らんばかりに喜んだ。

『どちらかと言へば丸顔の色のくつきり白い、肩つきの按排は西洋婦人のやうに肉附が佳くつて而もなだらかで、眼は少し眠いやうな風の、パツチリとはしないが物思に沈んでるといふ氣味がある。此眼に愛嬌を含めて凝然と凝視されるなら大概の鐵腸漢も軟化しますなア。處で僕は容易にやられて了つたのです。最初其女を見た時は別にさうも思つて居なかつたが、一度が二度、三度目位から變に引つけられるやうな氣がして、妙に其女のこと氣になつて來ました。それでも僕は未だ戀したとは思ひませんでしたねエ。』

『或日僕が其女の家へ行きますと、兩親は不在で唯だ女中と其少女と妹の十二になるのと三人ぎりでした。すると少女は身體の具合が少し悪いと言つて鬱いで、奥の間に獨、つくねんと坐つて居ましたが、低い聲で唱歌をやつて居るのを僕は縁側に腰をかけたまま聽いて居ました。』

『お榮さん僕はそんな聲を聴かされると何だか哀れつぽくなつて堪りません』と思はず口に出しますと、

『小妹は何故こんな世の中に生きて居るのか解らないのよ』と少女がさも／＼頼なささう

に言ひました。僕にはこれが大哲學者の厭世論にも優つて眞實らしく聞えたが、その先は詳しく言はないでも了解りませう。

『二人は忽ち戀の奴隷となつて了つたのです。僕は其時初めて戀の楽しさと哀しさを知りました。二月ばかりといふものは全て夢のやうに過ぎましたが、其中の出來事の一二はお安くない慕を話すと先づ斯なこともありましたつて、

『或日午後五時頃から友人夫婦の洋行する送別會に出席しましたが、僕の戀人も母に伴はれて出席しました。會は非常な盛會で、中には伯爵家の令嬢なども見えて居ました。夜の十時頃漸く散會になり、僕はホテルから芝山内の少女の宅まで、月が佳いから歩いて送ることにして、母と三人ぶら〜と行つて來ると、途々母は口を極めて洋行夫婦を褒め、頌と羨ましきうなことを言つて居ましたが、其言葉の中には自分の娘の餘り出世間的傾向を有して居るのを残念がる意味があつて、斯る傾向を有するも要するに其交際する友に由ると言はぬばかりの文句すら交へたので、僕と肩を寄せて歩いて居た娘は、僕の手を強く握りました、それで僕も握りかへした、これが母へ對する果敢ない反抗であつたのです。

『それから山内の森の中へ來ると、月が木間から蒼然たる光を洩して一段の趣を加へて居たが、母は我々より五歩ばかり先を歩いて居ました。夜は更けて人の通行も稀になつて居

たから、四邊は極めて靜に僕の靴の音、二人の下駄の響ばかり物々しう反響して居たが、先刻の母の言草が胸に應へて居るので僕も娘も無言、母も急に眞面目くさつて黙つて歩いて居ました。

『森影暗く月の光を遮つた所へ來たと思ふと少女は突然僕に抱きつかんばかりに寄添つて「貴方母の言葉を氣にして小妹を見捨ては不可ませんよ」と瞬き、其手を僕の肩にかけるが早いか僕の左の頬にべたり熱いものが觸れて一種、花にも優る香が鼻先を掠めました。突然明い所へ出ると、少女の兩眼には涙が一ばい含んで居て、其顔色は物凄く白かつたが、一は月の光を浴びたからでも有りませう。何しろ僕はこれを見ると同時に一種の寒氣を覺えて恐いとも哀しいとも言ひやうのない思が胸に塞へて、恰度、鉛の塊が胸を壓しつけるやうに感じました。

『其夜、門口まで送り、母なる人が一寸と上つて茶を飲めと侑めたを辭し自宅へと歸路に就きましたが、或難い謎をかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が悉く了解りでもするといつたやうな心持がして、決して比喩ぢやアない、確にさういふ心持がして、氣になつてならない。そこで直ぐは歸らず山内の淋しい所を選つてぶら〜歩き、何時の間にか丸山の上に出ましたから、ベンチに腰をかけて暫時く凝然と品川の沖の空を眺めて居まし

た。

「若しか彼女は遠からず死ぬるのぢやアあるまいか」といふ一念が電のやうに僕の心中最も暗き底に閃いたと思ふと僕は思はず躍り上りました。そして其所らを夢中で往きつ戻りつ地を見つめたまゝ歩いて「決して其なことはない」「断じてない」と、魔を叱るかのやうに言つて見たが、魔は決して去らない、僕をりりく足を止めて地を凝視して居ると、蒼白い少女の顔がありく、と眼先に現はれて来る。どうしても其顔色がこの世のものでないことを示して居る。

「遂に僕は心を静めて今夜十分眠る方が可い、全く自分の迷だと決心して丸山を下りかけました。すると更に僕を惑亂さする出来事にぶつかりました。といふのは上る時は少しも気がつかなく路傍にある木の枝から人がぶら下つて居たことです。驚きましたねエ、僕は頭から冷水をかけられたやうに感じて、其所に突立つて了ひました。」

「それでも勇氣を鼓して近づいて見ると女でした、無論その顔は見えないが、路にぬぎ捨てある下駄を見ると年若の女といふことが判る……僕は一切夢中で紅葉館の方から山内へ下りると突當にある彼の交番まで駈けつけて其由を告げました……」

「其女が君の戀して居た少女であつたといふのですかね」と近藤は冷やかに言つた。

「それでは全て小説ですが、幸に小説にはなりませんでした」

「翌々日の新聞を見ると年は十九、兵士と通じて懐胎したのが兵士には國に歸つて了はれ、身の處置に窮して自殺したものらしいと書いてありました。兎も角僕は其夜殆ど眠りませんでした。」

「然し能くしたもので、其翌日少女の顔を見ると平常に變つて居ない。そして其うつとりした眼に笑を含んで迎へられると、前夜からの心の苦惱は霧のやうに消えて了ひました。それから又一月ばかりは何のこともなく、たゞうれし楽しいことばかりで……」

「成程これはお安くないぞ」と綿貫が床を蹴つて言つた。

「まあ黙つて聽き給へ、それから」と松木は至極眞面目になつた。

「其先を僕が言はるか、斯うでせう、最後に其少女が欠伸一つして、それで神聖なる戀が最後になつた、さうでせう？」と近藤も何故か眞面目で言つた。

「ハツハツムムム」と二三人が噴飯して了つた。

「イヤ少なくとも僕の戀はさうであつた」と近藤は言ひ足した。

「君でも戀なんていふことを知つて居るのかね」これは井山の柄にない言草。

「岡本君の談話の途中だが僕の戀を話さるか？ 一分間で言へる、僕と或少女と乙な中に

なつた。二人は無我夢中で面白い月日を送つた。三月目に女が欠伸一つした。二人は分れた。これだけサ。要するに誰の戀でもこれが大切だよ。女といふ動物は三月たつと十人が十人、飽きて了ふ。夫婦なら仕方がないから結合くわついて居る。然し其は女が欠伸おびを嚙殺して其日を送つて居るに過ぎない。どうです君はさう思ひませんか？』

『さうかも知れませんが。然し僕のは幸に其欠伸までに達しませんでした。先を聴いて下さ』

「僕も其頃、上村君のお話と同様、北海道熱の烈しいのに罹つて居ました。實をいふと今でも北海道の生活は好からうと思つて居ます。それで僕も種々と想像を描いて居たので、それを戀人と語るのが何よりの樂でした。矢張上村君の亞米利加風の家は僕も大判の洋紙に鉛筆で圖取までしました。しかし少し違ふのは冬の夜の窓からちら／＼と燈火あかりを見せるばかりでない。折り／＼楽しさうな笑聲、澄んだ聲で歌ふ女の唱歌を響かしたかつたのです……』

『だつて僕は相手が無かつたのですもの』と上村が情けなさうに言つたので、どつと皆が笑つた。

『君が馬鈴薯黨を變節したのも、一は其故せいだらう』と綿貫が言つた。

「イヤ其れは嘘うそ言だ。上村君に若し相手があつたら北海道の土を踏まぬ先に變節して居たららうと思ふ。女といふ奴は到底馬鈴薯主義を實行し得るもんぢやアない。先天的のピフチキ黨だ。恰度僕のやうなんだ。女は芋が嗜好すきなんていふのは嘘サ！」と近藤が呶鳴るやうに言つた。其最後の一句で又た皆がどつと笑つた。

『それで二人は』と岡本が平氣で語りだしたので漸々やうやく靜まつた。

『二人は將來の生活地を北海道と決めて居まして、相談も漸く熟したので僕は一先故郷ひとまゝくにに歸り、親族に託してあつた山林田畑を悉く賣り飛ばし、其資金で新開墾地を北海道に作らうと、十日間位の積で國に歸つたのが、親族の故障やら代價の不折合やらで思はず二十日もかゝりました。

『すると或日少女の母から電報が來ました。驚いて取る物も取あへず歸京して見ると、少女は最早死んで居ました。

『死んだ？』と松本は叫んだ。

『さうです。それで僕の總ての希望が悉く水の泡となつて了ひました』と岡本の言葉の末だ終らぬうち近藤は左の如く言つた。それが全て演説口調。

『イヤどうも面白い戀愛談を聴かされ我等一同感謝の至りに堪へません。さりながらです』

僕は岡本君の爲めに其戀人の死を祝します、祝すといふが不穩當ならば喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却て喜びます、若しも其少女にして死なゝんだならばです、其の結果の悲惨なる、必ず死の悲惨に増すものが有つたに違ひないと信ずる』
とまでは頗る眞面目であつたが、自分でも少し可笑しくなつて來たか急に調子を變へ、聲を低うし笑味を含ませて、

『何となれば、女は欠伸あくびをしますから……凡そ欠伸に數種ある、其中最も悲むべく憎む可きの欠伸が二種ある、一は生命に倦みたる欠伸、一は戀愛に倦みたる欠伸、生命に倦みたる欠伸は男子の特色、戀愛に倦みたる欠伸は女子の天性、一は最も悲しむべく、一は最も憎むべきものである』
と少し眞面目な口調に返り、

『即ち女子は生命に倦むといふことは殆どない、年若い女が時々そんな様子を見せることがある、然し其は戀に渴して居るより生ずる變態たるに過ぎない、幸にして其戀を得る、其後幾年月かは至極樂しさうだ、眞に樂しさうだ、恐らく樂といふ字の全意義は斯る女子の境遇に於て盡されて居るだらう、然し忽ち倦んで了ふ、即ち戀に倦んで了ふ。女子の戀に倦んだ奴ほど始末にいけないものは決して他にあるまい、僕はこれを憎むべきものと言

つたが實は寧ろ憐れむべきものである、處が男子はさうでない、往々にして生命そのものに倦むことがある、斯る場合に戀に出遇ふ時は初めて一方の活路を得る。そこで全き心と捧げて戀の火中に投ずるに至るのである。斯る場合に在つては戀即ち男子の生命である』
と言つて岡本を顧み、

『ね、さうでせう。どうです僕の説は穿つて居るでせう』

『一向に要領を得ない！』と松木が叫んだ。

『はッ、ハ、要領を得ない？ 實は僕も餘り要領を得て居ないのだ、たゞ今のやうに言つて見たいので。どうです岡本君、だから僕は思ふんだ君が馬鈴薯黨でもなくピフテキ黨でもなく唯だ一の不思議なる願を持つて居るといふことは、死んだ少女に遇ひたいといふんでせう』

『否！』と一聲叫んで岡本は椅子を起つた。彼は最早餘程酔つて居た。

『否！』と先づ一語を下して置きます。諸君にして若し僕の不思議なる願といふのを聽いて呉れるなら談しませう』

『諸君は知らないが僕は是非聽く』と近藤は腕を振つた。衆皆は唯だだま黙つて岡本の顔を見て居たが、松木と竹内は眞面目で、綿貫と井山と上村は笑味あざわを含んで。

『それでは否の一語を今一度叫んで置きます』

『成程僕は近藤君のお祭りの通り戀愛に依て一方の活路を開いた男の一人である。であるから少女の死は僕に取つての大打撃、殆ど總ての希望を破壊し去つたことは先程申上げた通りです、若し例の返魂香といふ價物があるなら僕は二三百斤買ひ入れたい。どうか少女を今一度僕の手に戻したい。僕の一念こゝに至ると身も世もあらぬ思ひがします。僕は平氣で白状しますが幾度僕は少女を思うて泣いたでせう。幾度其名をよんで大空を仰いだでせう。實に彼少女の今一度此世に生き返つて來ることは僕の願です。』

『しかし、これが僕の不思議なる願ではない。僕の眞實の願ではない。僕はまだ大なる願、深い願、熱心なる願を以て居ます。この願さへ叶へば少女は復活しなくても宜しい。復活して僕の面前で僕を賣つても宜しい。少女が僕の面前で赤い舌を出して冷笑しても宜しい。』

『朝に道を聞かば夕に死すとも可なりといふのと僕の願とは大に意義を異にして居るけれど、其心持は同じです。僕は此願が叶はん位なら今から百年生きて居ても何の益にも立ない、一向うれしくない。寧ろ苦しう思ひます。』

『全世界の人悉く此願を有つて居なくても宜しい、僕獨り此願を追ひます、僕が此願を追

うたが爲めに其爲めに強盜罪を犯すに至つても僕は悔いない、殺人、放火、何でも關ひません、若し鬼ありて僕に保證するに、爾の妻を與へよ我これを姦せん爾の子を與へよ我これを喰はん然らば我は爾に爾の願を叶はしめんと言はゞ僕は雀躍して妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます』

『こいつは面白い、早く其願といふものを聞きたいもんだ!』と綿貫が其髯に力任せに引いて叫んだ。

『今に申します。諸君は今日のやうなグラ／＼政府には飽きられたらうと思ふ、そこでピスマークとブルとグラツドストンと豊太閤見たやうな人間をつきまぜて一つ鋼鐵のやうな政府を形り、思切つた政治をやつて見たいといふ希望もあるに相違ない、僕も實にさういふ願を以て居ます、併し僕の不思議なる願はこれでもない。』

『聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になりたい、眞實にさうなりたい、併し若し僕の此不思議なる願が叶はないで以て、さうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。』

『山林の生活!と言つたばかりで僕の血は沸きます。則ち僕をして北海道を思はしめたのもこれです。僕は折り／＼郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて、遠く地平線の上

に國境をめぐる連山の雪を戴いて居るのを見ると、直ぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる！然しです、僕の一念ひとたび彼の願に觸れると、斯んなことは何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら紅塵三千丈の都會に車夫となつて居てもよろしい。

『宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか、天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科學と哲學と宗教とはこれを研究し闡明し、そして安心立命の地を其上に置かうと悶えて居る、僕も大哲學者になりたい、ダルキン蹴足といふほどの大科學者になりたい、若しくは大宗敎家になりたい、併し僕の願といふのはこれでもない。若し僕の願が叶はないで以て、大哲學者になつたなら僕は自分を冷笑し自分の顔に「偽」の一字を烙印します』

『何だね、早く言ひ玉へ其願といふやつを！』—松木はもどかしさうに言つた。

『言ひませう、喫驚しちやアいけませんぞ』

『早く〜！』

岡本は靜かに、

『喫驚したいといふのが僕の願なんです』

『何だ！馬鹿々々しい！』

『何のこつた！』

『落語か！』

人々は投げだすやうに言つたが、近藤のみは黙つて岡本の説明を待つて居るらしい。
『斯ういふ句があります、』

Awake, poor troubled sleeper : shake off

Thy torpid night-mare dream.

即ち僕の願とは夢魔を振り落したいことです！』

『何のことだか解らない！』と綿貫は呟やくやうに言つた。

『宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です！』

『愈々以て謎のやうだ！』と今度は井山が其顔をつるりと撫でた。

『死の祕密を知りたいといふ願ではない、死てふ事實に驚きたいといふ願です！』

『イクラでも君勝手に驚けば可いぢやアないか、何でもないことだ！』と綿貫は嘲るやうに言つた。

『必ずしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰無くしては片時たりとも安する能はざるほどに此宇宙人生の祕義に惱まされんことが僕の願であります』

『成程こいつは益々解りにくいぞ』と、松木は呟やいて岡本の顔を穴のあくほど凝視して居る。

『寧ろ此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を剝り出したのが僕の願です！』と岡本は思はず卓を打った。

『愉快々々！』と近藤は思はず聲を揚げた。

『ヲルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽は喰ひたく思はない、彼が十九歳の時學友アレキシスの雷死を眼前に視て死そのものゝ秘義に驚いた其心こそ僕の欲する處であります。』

『勝手に驚けと言はれました、綿貫君は。勝手に驚けとは至極面白い言葉である、然し決して勝手に驚けないのです。』

『僕の戀人は死しました。此世から消えて失なりました。僕は全然戀の奴隷であつたから彼少女に死なれて僕の心は搔亂されたことは非常であつた。しかし僕の悲痛は戀の相手の亡なつたが爲の悲痛である。死てふ冷酷なる事實を直視することは出来なかつた。即ち戀ほど人心を支配するものはない、其戀よりも更に幾倍の力を人心の上に加ふるものがあることが知られます。』

『曰く習慣の力です。』

Our birth is but asleep and forgetting.

この句の通りです。僕等は生れて此天地の間に来る、無我無心の小兒の時から種々な事に遭遇ふ、毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶番となつて了ふ。哲學で候ふの科學で御座ると言つて、自分は天地の外に立て居るかの態度を以て此宇宙を取扱ふ。

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,

Heavy as frost, and deep almost as life!

この通りです、この通りです！

『即ち僕の願は如何にかして此霜を叩き落さんこととあります。如何にかして此古び果てた習慣の壓力から脱れて、驚異の念を以つて此宇宙に俯仰介立したいのです。その結果がビフテキ主義とならうが、馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此生命を謳はうが、決して頼着しない！』

『結果は頼着しません、原因を虚偽に置きたくない。習慣の上に立つて遊戯的研究の上に』

て喫驚ひつくりしたいといふ者も物數寄ものずまだねハ、、、』と綿貫は其太い腹をかゝへた。
『イヤ僕も喫驚ひつくりしたいと言ふけれど、矢張り單にさう言ふだけですよハ、、、』
『唯だ言ふだけのことか、ヒ、、、』
『さうか！唯だお願ひ申して見る位なんですねハツ、、、』
『矢張道樂でさアハツハツ、、ツ』と岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふ可
からざる苦痛の色を見て取つた。

運命論者

秋の半ば過、冬近くなると何れの海濱を問はず、大方は淋れて来る。鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網ぢびきあみの男、或は濱づたひひらひらに行通ゆきかよふ行商あきかを見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は何時いつのやうに滑川なまりがはの邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風が身に染むので直ぐ麓ふもとに下りて其處ら日あたりの可い所、身體からだを伸して樂に書ほんの讀めさうな所と四邊を見廻したが、思ふやうなところがないので、彼方あちら此方こちらと探し歩いた。すると一個所、面白い場所を發見みづけた。

砂山が急に崩くずれげて草の根で僅わずかにこれを支へ、其下したが崖がきのやうになつて居る。其根方に坐つて兩足を投げ出すと、春は彼の砂山に靠たれ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソーフアに倚よつたやうで、眞に心持の佳い場處である。

自分は持つて來た小説を懷から出して心長閑しんぢやんげんに讀んで居ると、日は暖かに照り空は高く晴れ此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、渚しづに轉ころがる波音なみねの穩かに重々しく聞える外は四圍寂然ひっそりとして居るので、何時いつしか心を全然ぜんぜん書籍しよきに取られて了つた。

然るにふと物音のしたやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處

に人が立つて居たのである。何時此處へ來て、何處から現はれたのか少しも氣がつかなくつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると年輩は三十ばかり、面長おもてながの鼻はなの隆たかい男、春はすらりとした瘦形やせがた、衣装みやうといひ品といひ、一見して別荘に來て居る人か、それとも旅宿を取つて滯留ちゆうりゆうして居る紳士と知れた。

彼は其處こゝに佇立つたつて自分の方を凝ぢと見て居る其眼つきを見て、自分は更に驚き且つ怪んだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑ふ猜忌さいぎの眼か、それにしては光鈍ひかりとんし。たゞ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味せみを帶ぶ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一步々々、靜かに歩きだした。されども此窪地くぼちの外に出ようとは仕ないで、たゞ其處らをブラ／＼歩いて居る。そして時々凄せみい眼で自分の方を見る。一たいの様子が尋常よつねでないので、自分は心持が悪くなり、場所を變へる積で其處を起ち、砂山の上まで來て、後かへりを顧みると、如何だらう怪しの男は早くも自分の坐つて居た場處からたに身體からだに投なげて居た！そして自分を見送つて居る筈が、さうでなく立てた膝の上に腕組うでぐみをして突伏つぐして顔を腕の間に埋めて居た。

餘りの不思議さに自分は様子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭かげに枯草かれぐさを敷いて這はひつくばひ、書まを見ながら、折々頭を舉げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上げなかつた。けれども十分とは自分を待たさなかつた、彼の起ちあがるや病人の如く、何となく力なげであつたが、起つたと思ふと其儘くるりと後向になつて、砂山の崖に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小さな洋盃様のものを出して、罎の栓を抜くや、一杯々々、三四杯續けさまに飲んだが、罎を靜かに下に置き、手に杯を持つたまま、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまま自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで来て、怪げな笑味を浮べながら、

「貴方は僕が今何を爲たか見て居たでせう？」
と言つた聲は少し噎れて居た。

「見て居ました」と自分は判然答へた。

「貴方は他人の秘密を覗がうて可いと思ひますか」と彼は益々怪しげな笑味を深くする。
「可いと思ひません」

「それなら何故僕の秘密を覗ひました」

「僕は此處で書籍を読むの自由を持つて居ます」

「それは別問題です」と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

「別問題ではありません。貴方が何を爲ようと僕が何を爲ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴方に秘密があるなら自から先づ秘密に爲たら可いでせう」

彼は急にそはくして左の手で頭の毛を掻るやうに掻きながら、

「さうです、さうです。けれども彼れが僕の爲し得るかぎりの秘密なんです」と言つて暫らく言葉を途切らし、氣を塞めて居たが、

「僕が貴方を責めたのは悪う御座いました、けれども何卒今御覽になつたことを秘密にして下さいませんかお願ひですが」

「お頼みとあれば秘密にします。別に僕の關したことはありませんから」

「難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました匆卒貴方を詰めまして……」と彼は人を歴しつけようとする最初の氣勢とは打つて變り、如何にも力なげに詫びたのを見て、自分も氣の毒なり、

「何もさう諷るには及びません、僕も實は貴方が先刻僕の前に佇立つて僕ばかり見て居た時の風が何となく怪かつたから、それで此處へ来て貴方の爲ることを覗がうて居たのです。矢張貴方を覗がつたのです。けれども彼の事が貴方の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい」

彼は黙つて自分の顔を見て居たが、

「貴方は必定守つて下さる方です。」と聲をふるはし、

「如何でせう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか」

「酒ですか、酒なら僕は飲まないはうが可いのです」

「飲まないはうが！飲まないはうが！無論さうです。もう飲まないで済むことなら僕とても飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲むのです。それが僕の秘密なんです。如何でせう、僕と貴方と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか」といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顔色は實に大なる秘密、痛しい秘密を包んで居るやうに思はれた。

「よろしう御座います、それでは一つ戴きませう。」と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立つて

元の場合へと引返すので、自分も其後に従つた。

二

「これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の龜屋へ行つて最上のを呉れると内證で三本買て来て此處へ匿して置いたのです、一本は最早たいらげて空罎は滑川に投げ込みました。これが二本目です。未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます」

自分は彼の差した杯を受け、少しづつ啜りながら彼の言ふ處を聞いて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高まるを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入らうとは思はなかつた。

「それで先刻僕が此處へ来て見ると、意外にも貴方が既に此場處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ。僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の筵を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんてと、僕はそれで貴方を見つめながら此處を去らなかつたのです」と彼は微笑して言つた。其眼元には心の底に潜んで居る彼の優しい、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が慘しげに見えた。其處で自分も笑を含み、

「さうでせう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座いません。さも恨

めしさうでした』

『イヤ恨めしくは御座いません、情けなかつたのです。オヤ、乃公は隠して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷かれて了ふのか、と自分の運命を詛つたのです。詛ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄了見も亦た氣力もありません。運命が僕を詛うて居るのです——貴方は運命といふことを信じますか？え、運命といふこと。如何です、も一つ』と彼は纒を上げたので、

『イヤ僕は最早戴きますまい』と杯を彼に返し、『僕は運命論者ではありません』
彼は手酌で飲み酒氣を吐いて、

『それでは偶然論者ですか』

『原因結果の理法を信するばかりです』

『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴方は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか？』

『感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神祕らしい名目を其力に加へることは出

『さうですか、さうですか、解りました。それでは貴方は宇宙に神祕なしと言ふお考なのです、要之、貴方には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴方の頭は二々が四で、一切が間に合ふのです。貴方の宇宙は立體でなく平面です。無窮無限といふ事實も貴方には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフィニティー（無限）を式で示さうとする數學者のお仲間でせう』と言つて苦しきさうな嘆息を洩らし、冷かな、嘲るやうな語氣で、

『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴方は運命に祝福されて居る方、貴方の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です』

『それでは此で失禮します』と自分は起上がった、すると彼は狼狽て自分を引止め、

『ま、ま、貴方怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひます。つい其の自分で勝手に苦しんで勝手に種々なことを、馬鹿な譯にも立たん事を考へて居るもんですから、つい見境もなく饒舌なのです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何だか貴方には言つて見たう感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴方には笑はれるかも知れませんが、僕にはやはり怪しの運命が僕と貴方を引寄せ

たやうに感ぜられるのです。不幸な男と思つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし……』

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……』

『さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし……、噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでせう！酔つたのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴方にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聽いて下さい、僕の不幸な運命を！』

此苦痛の叫を聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きませうとも。僕が聽いてお差支へがなければ何事でも承りませう』

『聽いて下さいますか。それならお話しませう。けれども僕は運命の怪しき力に惑うて居る者ですから、其積で聽いて下さい。若し原因結果の理法と貴方が言ふならそれでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴方が知りましたなら、それを僕が怪しき運命の力と思ふのを無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます。で貴方に聞きますが此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一つの石が飛んで來

て其男の頭に命中り、即死する、その爲めに其男の妻子は餓に沈み、其爲めに母と子は争ひ、其爲めに親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が此世に有り得ることゝ貴方は信ずるでせうか』

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝ信じます、それは』

『さうでせう、それなら貴方は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲惨がやゝもすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認むるのです、僕の身の上の如き、全く其れなので、殆んど信ず可からざる怪しい運命が僕を弄んで居るのです。僕は運命と言ひます。僕にはさう外には信じられんですから』と言つて彼は吻と嘆息を吐き、

『けれども貴方聽いて呉れますか』

『聴きますとも！何卒お話し下さい』

『それなら先づ手近な酒のことから話させう。貴方は定めし不思議なことゝ思つて居るでせうが、實は世間に有りふれたことで、苦惱を忘れたさの魔酔劑に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠して飲まなければならぬ宅の事情があるからなので、その上、此場所は如何にも靜かで且つ快潤で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人の視がふ暗い蔭のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横たへて酒精の力に身を託し高い

大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに弱り果てた僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます』

『そんなら貴方は、自殺を願うて居るのですか』と自分は驚いて問うた。

『自殺ぢやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないので。貴方、運命の鬼が最も巧に使ふ道具の一は「惑」ですよ。「惑」は悲を苦に變へます。苦惱を更に自乗させます。自滅は決心です。始終惑のために苦しんで居る者に、如何して此決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張り自滅といふ遅鈍な方法しか策がないのです』

と染々言ふ彼の顔には明に絶望の影が動いて居た。

『如何いふ理由があるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之を傍觀する譯には行きません。自滅といふも自殺に違ひないので。』と自分が言ふや、

『けれども自殺は人々の自由でせう』と彼は笑味を含んで言つた。

『さうかも知りません。然し之れを止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です』

『可う御座います。僕も決して自滅したくは有りませんが、若し貴方が僕の物語を悉皆聴いて、其上で僕を救ふの策を立て、下さるのなら僕は此上もない幸福です』

斯う聞いては自分も黙つて居られない。

『可しい！何卒か悉皆聴かして貰ひませう。今度は僕の方からお願ひします』

三

『僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は養家のを冒したので、僕の元の姓は大塚といふのです。』

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛藏と言つて御存知でも御座いますか、東京控訴院の判事としては一寸世間にも名の知れた男で、剛藏の名を示す如く、剛直一遍の人物、随分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひで、たゞ物蔭に一人引込んで、何を考へるともなく茫然して居ることが何より好きでした。十二歳の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆ど散り盡して、色褪せた花瓣の未だ梢に残つて居たのが、若葉の隙からホロ／＼と一片二片落つる様を今も判然と想ひだすことが出来るので知れます。僕は土藏の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺めて居ますと、夕日が斜に庭の木の間射し込んで、

さなきだに静かな庭が、一層肅然して、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀いやうな
 楽いやうな、所謂春愁でせう、そんな心地になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、兒童の胸にも春の静な夕を感じることに、實際有
 り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はさういふ少年でした。父の剛蔵はこのことを大變苦にして、僕のことを坊
 主臭い子だと数々小言を言ひ、僧侶なら寺へ與つて了ふなど呶鳴つたこともありませう。そ
 れに引かへ僕の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ツ年齢が下でしたが骨格も父に肖て逞し
 く、氣象もまるで僕とは異つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たものです。母といふはお豊とい
 ひ、言葉の少ない、柔和らしく見えて確固した氣象の女でしたが、僕を叱つたこともなく、
 さりとて甘やかす程に可愛がりもせず、言はゞ寄らず觸らずにして居たやうです。

それで僕の氣象が生來今言つたやうなのであるか、或はさうでなく、僕が小兒の時、早
 く不自然な境に置れて、我知らず孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦にしました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の上を憂ふる
 のとは異つて居たのです、それで父が「折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな

男は育て甲斐がない」と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が
 見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が付きませんでした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山
 の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。

或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時
 の間にか父が傍に来て、

「お前は何を考へて居るのだ、持つて生れた氣象なら致方もないが、乃公はお前のやうな
 氣象は大嫌だ、最少し確固しろ」と眞面目な顔で言ひますから、僕は顔も上げ得ないで黙
 つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

「オイ信造」と言つて急に聲を潜め「お前は誰かに何か聞きは爲なかつたか」

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知ら
 ず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に變り、益々聲を潜めて、

「感すには及ばんぞ、聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃公には考案があるから。
 サア感さずに言ふが可え。何か聞いたらう？」

此時の父の様子は餘程狼狽して居るやうでした。それで聲さへ平時と變り、僕は可怕く

なりましたから、しく／＼泣き出すと、父は益々狼狽へ、

『サア言へ！聞いたら聞いたと言へ！慥すかお前は』と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

『御免なさい、御免なさい』とたゞ謝罪りました。

『謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞いて、それで茫然考へて居るのぢやないかと思ふから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！』と今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な悪いことでもしたのかと、おろ／＼聲で、

『御免なさい。御免なさい』

『馬鹿！大馬鹿者！誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く』

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熱と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

『泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え』と優しく言つた其言葉は少いが、熱愛に満ちて居たのです。

其後でした、父が僕のことを餘り言はなくなつたのは。けれども又其後でした僕の

心の底に一片の雲影の沈んだのは、運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の子供なら問もなく忘れて了つたゞらうと思ひますが、僕は忘れる處か、問がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問うたのか、父が斯くまでに狼狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に種々と考へて、そして其大事は僕の身の上に関するのだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のことゝ自分で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見ると同じ事だ、不自然なる境に置かれた少年は何時しか其暗き不自然の底に潜んで居る黒點を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の眞相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりながらも、これを父に問ひ返すことは出来ず、又母には猶更出来ず、小さな心を痛めながらも月日を送つて居ました。そして十五の歳に中學校の寄宿舎に入れられました、其前に一つお話して置く事があるのです。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺いたづまの小さな家がある、それに老人夫婦と其頃十六七になる娘が住んで居ました。以前は立派な士族で、桑畑は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善なかよしでしたが、或日僕に圍碁お碁の遊戯あそびを教へて呉れました。二三日経て夜食の時、このことを父母に話しました處、何時も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て、叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合した時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。

何故僕が圍碁を敵としなければならぬか、それも後に解わかりましたが、其が解つた時こそ、僕が全く運命の鬼に壓倒せられ、僕が今の苦惱を嘗め盡す初で御座いました。

四

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舎に残されました。

僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけであつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢復し、惡運の手より脱れ、身の上の疑惑を懐くこと次第に薄くなり、沈鬱しんうつの氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快活な青

年の氣を帯びて來ました。

然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な僕の心は急に擾亂かくはんされ、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して、せめて今年卒業の日まで此儘にして置いて貰はうかと思ひましたが、思ひ返して直ぐ上京しました。麴町の宅に着くや、父は一室ひとむまに僕を喚よんで、『早速だがお前と能く相談したいことが有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね』

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出來な

5。

『實は手紙で詳しく言つてやらうかと思つたが、廻りくどいから喚よんだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までも志して居たらうけれど、人は一日も早く獨立の生活を督つとむ方が可えことはお前も知つて居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律學校に入るのぢや。三年で卒業する。辯護士の試験を受ける。そした曉わかは私と懇意な辯護士の事務所世話してやるから、其所で四五年も實地の勉強をするのぢや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となることが出來る。如何どうぢやな、其方が近道ちかみちぢやぞ』といふ父の言葉を聽いて居る僕の心の全く顛倒

したのも無理はないでせう。

之實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。大塚剛藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らず識らず其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年、其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天真に歸るべき門、墳墓に近づくと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認することが出来ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述べるところではありません。たゞこれ命これ従ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の様子も一變して居たのです。日の經つに従うて僕は僕の身の上一大秘密のあることを益々信するやうになり、父母の舉動に氣をつけなければつけるほど疑惑を増すばかりなのです。

一度は僕も自分の僻みだらうかと思ひましたが、生憎と想起すは十二の時、庭で父から問ひつめられた事で、彼を想ひ、これを思へば、最早自分の身の秘密を疑ふことは出来ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月を経ちましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を済ますや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、『何ぞ用か』と問ひ、やはり筆を執つて居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に坐つて、暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨で來たと見え、扇を打つ響の音がバラバラ聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、

『何ぞ用でもあるか』と優しく問ひました。

『少し訊ねたいことが有りますので』と總かに口を切るや、父は早くも様子を見て取つたが、

『何ぢや』と嚴かに膝を進めました。

『父様、私は眞實に父様の兒なのでせうか』と兼て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

『何ぢやと』と父の一言、其眼光の鋭さ！けれども直ぐ父は顔を柔げて、

『何故お前はそんなことを私に聞くのぢや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか』

『さういふ譯では御座いませんが、私には昔から如何いふ者か此疑があるので、始終胸を痛めて居るので御座います、知らして益のない秘密だから父上も黙つてお出でになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います』と僕は靜に、決然と言ひ放ちました。

父は暫時く腕組をして考へて居ましたが、徐ろに顔を上げて、

『お前が疑ぐつて居ることも私は知つて居たのぢや、私の方から言うた方がと思つたことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶ほ言うて了ふが可えから言ふことにしよう』とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分、馬場金之助といふ碁客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出来ないものと諦めて居ると、馬場が病で歿し、其妻も間もなく夫の後を追うて此の世を去り、残つたのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の子として養つたので、父からいふと半分は孤兒を救ふ義侠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども僕の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生れ、其爲でせう、僕の出産届が未だしてなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の子として届けたのださうです。

以上の事を話して大塚の父のいふには、

『其後私は間もなく山口を去つたから、お前を私の實子でないと知るものは多くないのぢや。私達夫婦は飽くまで實子の積でこれまで育てゝ來たのぢや。この先も同じことだからお前も決して僻み根性を起さず、何處までも私達を父母と思つて老先を見届けて呉れ。秀輔は實子ぢやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實の兄となつて生涯彼れの力ともなつて呉れ』と、老の眼に涙を見るより先に僕は最早泣いて居たのです。

其處で養父と僕とは此等の秘密を飽くまで人に洩さぬ約束をし、又た僕が此先何かの用事で山口にゆくとも、たゞ餘所ながら父母の墓に詣で、決して公けにはせぬといふことを養父に約しました。

其後の月日は以前よりも却つて穩かに過ぎたのです。養父も秘密を明けて却つて安心した様子、僕も養父母の高恩を思ふにつけて、心を傾けて敬愛するやうになり、勉學をも勵むやうになりました。

そして一日も早く独立の生活を営み得るやうになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督を譲りたいものと深く心に決する處があつたのです。

三年の月日は忽ち逝き、僕は首尾よく學校を卒業しましたが、猶ほ養父の言葉に従ひ、一年間更に勉強して、さて辯護士の試験を受けました處、意外の上首尾。養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所へ周旋して呉れました。

兎も角も一人前の辯護士となつて日々京橋區なる事務所に通うて居ましたが、若し彼のまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて益々前途の幸福を樂んで居たでせう。

けれども、僕は如何しても惡運の兒であつたのです。殆ど何人も想像することの出來ない陥穽が僕の前に出來て居て、惡運の鬼は慘酷にも僕を突き落しました。

五

井上博士は横濱にも一ヶ所事務所を持つて居ましたが、僕は二十五の春、此事務所に詰めることとなり、名は井上の部下であつても其實は僕が獨立でやるのと同じことでした。年齢の割合には早い立身と云つても可いだらうと思ひます。

處が横濱に高橋といふ雜貨商があつて、随分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名

は梅、所夫は二三年前に亡なつて一人娘の里子といふを相手に、先づ贅澤な暮らしをして居たのです。

訴訟用から僕は此家に出入することとなり、僕と里子は戀仲になりました。手短かに言ひますが、半年経たぬうちに二人は離れることの出來ないほど逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒酌となり、遂に僕は大塚の家を離居し高橋の養子となりました。

僕の口から言ふも變ですが、里子は美人といふほどでなくとも随分人目を引く程の容色で、丸顔の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいひますが全く僕を愛して呉れます。けれども此愛は却つて今では僕を苦しめる一大要素になつて居るので、若し里子が斯くまでに僕を愛し、僕が又た斯うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しむはしないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た處、四十位にしか見えぬ、小柄の女で美人の相を備へ、なか／＼立派な婦人です。そして情の烈しい正直な人柄といへば、智慧の方はやゝ薄いと云ふことは直ぐ解るでせう。快活で能く笑ひ能く語りますが、如何かすると恐しい程沈鬱な顔をして、半日何人とも口を交へないことがあります。僕は養子とならぬ以前から此人

柄に氣をつけて居ましたが、里子と結婚して高橋の家に寝起することゝなつて間もなく、妙なことを發見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王を一心不亂に拜むこととて、口に何ごとか念じつゝ床の間にかけて火炎の像の前に禮拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです。晝間の中、沈鬱いて居た晩は殊にこれが激しいやうでした。

僕も初めは黙つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを里子に訊ねると、里子は手を振つて聲を潜め『黙つて居らっしゃいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大變機嫌を悪くしますから、成るべく知らん顔をして居たはうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣でせう』と別に氣にもかけぬ様なので、僕も強ひては問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終へて雑談して居ると、養母は突然、

「怨靈といふものは何年経つても消えないものだらうか？」と問ひました。すると里子は平氣で、

「怨靈なんて有るもんぢやアないわ」と一言で打消さうとすると、母は向になつて、

「生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ」

「そんなら母上は見て？」

「見ましたとも」

「オヤさう、如何な顔をして居て？私も見たいものだ」と里子は何處までも冷かしてかゝつた。すると母は凄いほど顔色を變へて、

「お前怨靈が見たいの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なこといふよ此人は！」と言ひ放ち、つつと起て自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

「母上如何かして居なさるよ、氣を附けんと……」

里子は不安心な顔をして

「私眞實に氣味が悪いわ。母上は必定何か妙なことを思つて居るのですよ」
 「ちつと神経を痛めて居なさるやうだね」と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つたことはないのです。變つて居るのは唯だ何時もの通り夜になると不動様を拜むことだけで、僕等もこれは最早見慣れて居るから強ひて氣にもかゝりませんでした。
 處が今年の五月です。僕は平常よりか二時間も早く事務所を退いて家へ歸りますと、其

日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内もせず襖を閉けて中に入ると母は火鉢の傍にぼつねんと坐つて居ましたが、僕の顔を見るや、

「ア、ア、アツ、アツ！」と叫んで突起つたかと思ふと、又尻餅を舂いて熟と僕を見た時の顔色！僕は母が氣絶したのかと喫驚して傍に駈寄りました。

「如何しました、如何しました」と叫んだ僕の聲を聞いて母は僅に坐り直し、

「お前だつたか、私は、私は……」と胸を撫すつて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚いて、

「母上如何なさいました」と聞くと、

「お前が出抜に入つて來たので、私は誰かと思つた。お、喫驚した」と床を敷かして休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神經に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、僕などは名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて來て、自分の居間の所々に貼つけたものです。そして更に妙なものは、これまで自分だけで勝手に信じて居たのが、僕を見て驚いた後は、僕に向つても不動を信じろといふので、僕が何故信じなければならぬかと聞くと、

「たゞ黙つて信じてお呉れ。それでないと私が心細い」

「母上の氣が安まるのなら信仰も仕ませうが、それなら私よりもお里の方が可いでせう」

「お里では不可ません。彼には關係のないことだから」

「それでは私には關係があるのですか」

「まアそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから」といふ母の言葉を里子も傍で聞いて居ましたが、呆れて、

「妙ねえ母上、不動様が如何して母上さんと信造さんとは關係があつて私には無いのでせう」

「だから私が頼むのぢやアありませんか、理由が言はれる位なら頼みはしません」

「だつて無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを言つたつて……」

「そんなら頼みません！」と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、

「イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母上まア其理由を話して下さいな。如何なことか知りませんが、親子の間だから少しも明されない様なことは無いでせう」と求めました。それは母の言ふ處に由つて迷信を歴へ神經を靜める方法もあらうかと思つ

たからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、
 『これ限りの話だよ、誰にも知らしてはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に
 縁づかない前に或男に言ひ寄られて執着追ひ廻されたのだよ。けれ共私は如何しても其男
 の心に従はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで種々な
 ことを言つたさうです。それで私も可い心持はしなかつたが、此處へ縁づいてから別に氣
 にもせんで暮して居ました。ところが所夫が亡くなつてからといふものは、其男の怨靈が
 如何かすると現れて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を取殺さうとするのです。それ
 で私が不動様を一心に念ずると其怨靈がだん／＼消えて無くなります。それに』と、母は
 一層聲を潜め『この頃は其怨靈が信造に取ツついたらしいよ』
 『まア嫌な！』里子は眉を擡めました。

『だつてね、如何かすると信造の顔が私には怨靈そつくりに見えるのよ』
 それで僕に不動様を信じろと勧めるのです。けれども僕にはそんな眞似は出来ないから、
 里子と共に種々と怨靈などいふものゝ有るべきでないことを説いたけれど無益でした。母
 は堅く信じて疑はないので、僕等も持餘し、此の鎌倉へでも來て居て精神を静めたらと、
 無理に勧めて遂に此處の別荘に入れたのは今年の五月のことです』

六

高橋信造は此處まで話して來て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪
 へぬ様であつたが、手早く杯をあげて一杯飲み干し、

『この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短かに話しますから、其以上
 は貴方の推察を願ふだけです。』

高橋梅、則ち養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異にした僕
 の妹であつたのです。如何です、是が奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも原
 因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知らず識らず此身を置
 かれた僕から言へば、天地間にかゝる慘酷なる理法すら行はるゝを怨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡單に言へば、母が鎌倉に來てから
 一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくことゝなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ま
 したから、見舞かた／＼鎌倉へ來て母に此事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口な
 どへ寄るなと言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に參る積がありますから、母に
 は可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。
 兼て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ判りました。けれども僕は馬場金之助の墓の

み見出して、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤も唯だ所縁ゆかりのもののみ、僕の身の上は打明けないので。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲更に重くなつたのを氣の毒とも思はず、遂に乳飲ちのみこ兒を置き去りにして駈落かけおちして了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死しにまは際に大塚剛藏に其一子を託したことまで語りました。

其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が即ちそれであることを確信したので。

僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つたら、寧ろ僕は幸であつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一は何とかして確な證據を得たため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないので。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝てないので、僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたは此事です。

僕は里子を擁して泣きました、幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくなりました。憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母と同じく怨靈を信ずるやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所夫どうとを救はうとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないやうにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでせうよ。僕は怨靈の兒ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です。然し僕は母が僕の父を瀕死の際に捨て、僕を瀕死の父の病床に捨て、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るのです。僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞えるのです。僕の眼には疲れ果てた身體からだを起して、何も知らない無心の子を擁いだき、男泣きに泣き給うた様が見えるのです。そして此聲を聞き此様を見る僕には實に怨靈の氣が乗移るのです。

夕暮の空ほの暗い時に、柱もたに靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝して天の一方を睨

む様を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も消えて、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

處が此九月でした。僕は餘りの苦惱くるしみに平生殆ど酒杯こぶつを手にせぬ僕が、里子の止めるのも聴かず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然録倉から歸つて来て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其の理由わけの尋常でないことを悟つたのです。

一時間ばかり経つと里子は眼を泣き彫らして僕の居間に歸つて來ましたから、

『如何したのだ』と聞くと里子は僕の傍そばに突伏つぷして泣きだしました。

『母上おつかさんが僕を離婚すると云つたのだらう』僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽あわてで、『だからね、母が何と言つても所夫そと決して氣にしないで下さいな。氣狂だと思つて投擲うつちやつて置いて下さいな、ね、後生ですから』と泣聲を震はして言ひますから、『さういふことなら投擲うつちやつて置く譯に行かない』と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間ひまもなかつたので僕に續いて部屋に入つたのです。僕は母の前に坐るや、

『貴女あなたは私を離婚すると里子に言つたさうですが、其理由を聞きませう。離婚するならばし

でも私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由わけを被仰おつしやい。是非其の理由を聞きませう』と辭に任せて詰寄りしました。すると母は僕の劍幕の餘り鋭いので喫驚びつくりして僕の顔を見て居るばかり、一言も發しません。

『サア理由を聞きませう。怨靈が私に乗移つて居るから氣味が悪いといふのでせう。それは氣味が悪いでせうよ。私は怨靈の兒ですもの』と言ひ放ちました、見る／＼母の顔色は變り、物をも言はず部屋の外へ駈け出て了ひました。

僕は其の儘母の居間に寢て了つたのです。眼が覺めるや酒の酔も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顔を見て坐つて居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に交かつて此方こちらに來て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は兩方を交る／＼介抱して、二人の不幸をば一人で正直に解釋し、たゞ／＼怨靈りやうの業わざとのみ信じて、二人の胸の中の眞まことの苦惱くるしみを全然知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう。此のやうな目に遇つて居る僕がブランデーの隱飲かくしのみをやるのは果して無理でせうか。

今や僕の力は全く惡運の鬼に挫がれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意氣地のないものと成り果てゝ居るのです。

如何でせう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の経過を考へて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ原因結果の理法に過ぎないと數學の式に對するやうな冷やかな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが事實です。そして僕の運命です。

若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹しんで教を奉じます。其人は僕の救主です。

七

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であるツクムゝ氣の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、

『断然離婚なさつたら如何です』

『それは新らしき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えません』

『けれども其は止むを得ないでせう』

『だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消えません。離婚した處で妹を妻として愛する僕の愛は變りません。人の力を以て過去の事實を消すことの出来ない

限り、人は到底運命の力より脱るゝことは出来ないでせう』

自分は握手して、黙禮して、此不幸なる青年紳士と別れた。日は既に落ちて餘光華やかに夕の雲を染め、願れば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺めて居た。

其後自分は此男に遇はないのである。

明日も来るべく、今日も過ぎなんとし、昨日は逝きたり、日々同じ夢のみ繰返しつゝ過ぎゆく。實に憐れなるは、この天地を夢にてつゝむことなり。如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もがな。利刃を以て肉皮をそぎとるが如くに痛快に此の心眼の被覆を去りたし。其の方法もがな。深夜月に對して瞑想したり。薄暮、若王寺の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに心のをのゝきしを感じしに過ぎず。忽然としてさめざる也。われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向つて心から爲し得んことは難いかな。されど此の問を發せんことは吾が願なり。われは此願の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

——阿本の手紙より——

女
難

今より四年前の事である、(と或男が話した) 自分は何かの用事で銀座を歩いて居ると、或四辻の隅に一人の男が尺八を吹いて居るのを見た。七八人の人が其前に立つて居るので、自分もふと足を止めて聴く人の仲間に加はつた。

頃は春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並の影が東側の家の礎から二三尺も上に這ひ上つて居た。それで尺八を吹く男の腰から上は鮮かな夕陽に照らされて居たのである。

夕暮近いので、街は一層の雑踏を極め、鐵道馬車の往來、人車の東西に駈けぬける車輪の音、途を急ぐ人足の響など、四方は騒然紛然として居た。此騒がしい場所の騒がしい時に彼男は悠然と尺八を吹いて居たのである。それであるから、自分の目には彼が半身に浴びて居る春の夕陽までが如何にも靜かに、穩かに見えて、彼の尺八の音の達く限り、其所に悠々たる一寰區が作られて居るやうに思はれたのである。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を聴きながらも、熟々彼の姿を見た。

彼は盲人である。年頃は三十二三でもあらうか、日に焼けて黒いのと、垢に埋れて汚ないのとで年も確とは判じかねるほどであつた。たゞ汚ないばかりでなく、見るからして彼

は甚だ憔悴して居た、思ふに晝は街の塵に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢染みたる夜具を被るのであらう。容貌は長い方で、鼻も隆く眉毛も濃く、額は櫛を加へたこともない蓬々とした髪で半ば被はれて居るが、見たところ程能く發達し、よく下品な人に見るやうな骨張つた無下に凸起した額ではない。

音の力は恐ろしい者で、如何な下等な男女が彈吹しても、聴く方から思ふと、何となく彈吹者其人までをゆかしく感ずるものである。殊に此盲人は其のむさぐるしい姿に反映して何處となく人品の高いところがあるので、猶ほ更ら自分の心を動かした。恐らく聴いて居る他の人々も同感であつたらうと思ふ。其吹き出づる哀樂の曲は彼が運命拙なき身の上の舊歡今悲を語るが如くに人々は感じたであらう。聴き捨てにする人は少なく、一錢二錢を彼の手に握らして立去るが多かつた。

二

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑さを避け、山に近き一小屋を借りて住んで居た。或夜のこと、月影殊に冴えて居たので獨り散歩して濱に出た。

濱は晝間の賑ひに引きかへて、月の景色の妙なるにも拘はらず人出少し。自分は小川の海に注ぐ汀に立つて波に碎くる白銀の光を眺めて居ると、何處からともなく尺八の音が微

に聞えたので、四逆を見まはすと、笛の音は西の方、程近いところ、漁船の多く曳上げてある邊から起るのである。

近づいて見ると、果して一艘の小舟の水際より四五間も曳上げてあるを其周囲を取り捲いて、或者は舷に腰かけ、或者は砂上に蹲居り、或者は立ちなど、十人あまりの男女が集つて居る、其中に一人の男が舷に倚つて尺八を吹いて居るのである。

自分人々の群よりは、離れて聴いて居た。月影はこんもりと此一群を映らして居る。人々は一語を發しないで耳を傾けて居た。今しも一曲が終つたらしい、聴者の三四人は立ち去つた。餘の人々は次の曲を待つて居るけれど吹く男は尺八を膝に突き首を垂れたまゝ身動もしないのである。斯して又四五分も経つた。他の三四人が又立ち去つた。自分は小舟に近づいた。

見ると残つて居る聴者の三人は濱の童の一人、村の若者の二人のみ、自分は舷に近く笛吹く男の前に立つた。男は頭を上げた。思ひきや彼は此春、銀座街頭に見たる其盲人ならんとは。されど盲人なる彼れの盲目ならずとも自分を見知るべくもあらず、暫時自分の方に向いて居たが、やがて又吹き初めた。指端を弄して低き音の響の如きを引くこと暫し、突然中止して舷より下りた。自分は卒然、

『盲人さん、私の宅に来て、少し聞かして呉れんか』

『へい、へい』と彼は驚いたやうに言つて急に自分の顔を見て、そして又頭を垂れ首を傾け『へい、何處様へでも参ります』

『ウン、それぢや来てお呉れ』と自分は先に立つた。

『お前の眼は全く見えないのかね』と四五歩にして振り返りさま自分は問うた。

『イ、エ、右の方は少し見えるので御座います』

『少しでも見えれば結構だね』

『へい、へい』と彼は軽く笑つたが『イヤなまじすこしばかり見えるのも能く御座いません、慾が生まれてな』

『オイ橋だぞ』と溝にかけし小橋に注意して『けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼ぐわけにはゆかんではないか』

『稼ぐのなら宜う御座いますが流すので……』

『お前何處だい、生れは』

『生れは西で御座います、へい』

『私はお前を此春、銀座で見たことがある、如何いふものか其時から時々お前のことを思

ひだすのだ、だから今もお前の顔を目見て直ぐ知った」

『へい左様で御座いますか、へいもう行き當りばつたりで足の向き次第、國々を流して歩くので御座いますから何處で何誰様に逢ひます事やら……』

途で二三の年若い男女に出遇つた。輕雲一片月をかざしたので四邊は朦朧になつた。手風琴の輕い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅に着いた。

三

縁側しんがわに席を與へて、先づ麥湯一杯、それから一曲を所望した。自分は尺八の事には全然素人であるから、彼が吹く其曲の善惡、彼の技の巧拙は解らないけれども、心をこめて吹く其音色の脈々として我に迫る時、われ知らず凄動したのである。泣かんか泣くには餘り悲哀深し、吹く彼は抑も何の感ずることなきか。

曲終れば、音を賣るものゝ常として必ず笑み、必ず譚遜の言葉の二三を吐くはなるに反して、彼は默然として控へ、今しも我が吹き終つた音の虚空に消えゆく、消えゆきし、其跡を逐ふかと思はるゝ許りであつた。

自分は彼の言葉つき、其態度に依り、初より其身の上に潜める物語のあるべきを想像して居たから、遠慮なく切りだした。

『尺八は本式に稽古したのだらうか、失敬なことを聞くが』

『い、エ左様ではないので御座います、全く自己流で、たゞ子供の時から好きで吹き慣らしたといふばかりで、人様にお聞かせ申すものではないので御座います、へい』

『イヤさうでない、全く巧妙うまいものだ、それほど技があるなら人の門を流して歩かないで、も弟子でも取つた方が樂だらうと思ふ、お前ひとりもの獨身者かね？』

『へい、親もなければ妻子もない氣樂な孤獨者ひとりもので御座います、へッへ、へ、へ、』

『イヤ氣樂でもあるまい、日に焼け雨に打たれ、住むところも定まらず國々を流れゆくなどは餘り氣樂でもなからうぢやアないか。けれどもいづれ何か理由のあるとだらうと思ふ、身の上話を一つ聞かして貰ひたいものだ』と思ひ切つて正面から問ひかけた。人の不幸や零落につけてこんで、其祕密まで聞かうとするのは、決して心あるものゝすることでないとは承知しながらも、彼に二度まで遇ひ、其遇うた場所と趣とが少からず自分を動かしたために、それらを顧慮することが出来なかつたのである。

『へい、お話しても宜しう御座います。今日は如何いふものか頻りと子供の時の事を想ひだして、先程も別荘の坊様達がお庭の中で聲を揃へて唱歌を歌つてお出でになるのを聞いた時何だか泣きたくなりました。』

私の九、十の頃で御座います、能く母に連れられて城下から三里奥の山里に住んで居る叔母の家を訪ねて、二晩三晩泊つたもので御座います。今日も恰度その頃のことを久しぶりて思ひ出しました。今思ふと、私が十七八の時分他が尺八を吹くのを聞いて、心を捲られるやうな気がしましたが今私が九や十の子供の時を想ひ出して堪らなくなるのと丁度同じ心持で御座います。

父には五の歳に別れまして、母と祖母との手で育てられ、一反ばかりの廣い屋敷に山茶花もあり百日紅もあり、黄金色の荔枝の實が袖垣に下つて居たのは今も眼の先にちらつきます。家と屋敷ばかり廣うても貧乏士族で實は喰ふにも困る中を母が手内職で、子供心には何の苦勞もなく日を送つて居たので御座います。

母も心細いので山家の里に時々歸るのが何よりの樂み、朝早く起きて、淋しい土族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼくと歩きだす時の心持は何とも言へませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めの中こそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の鮎に石を投げたりして參りますが峠にかゝる半程で凹たれて了ひました。それを母が勵まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とか言ひまして茶屋の婆が一人定めの名物を喰はして貰ふのを榮みに、又一呼吸の勇氣を出しました。峠を越して半程まで來ると、直ぐ下に叔母の村里

が見えます、春さきは狭い谷々に霞が變黠いて晝のやうで御座いました、村里が見えると最早着いた氣で其處の路傍の石で一休みしまして、母は煙草を吸ひ、私は山の崖から落ちる清水を飲みました。

叔母の家は古い郷士で、其頃は大分家産が傾いて居たさうですが、それでも私の日には大變金持のやうに見えたので御座います。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、葛の這ひ上つた練塀や、深い井戸が私には皆な難有かつたので、下男下女が私のことを城下の旦那様と言つてくれるのが嬉しかつたので御座います。

けれども何より嬉しくつて今思ひだしても堪りませんのは同じ年輩の従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人は能く山の峽間の溪川に山鱒を釣りに行つたもので御座います。山岸の一方が淵になつて蒼々と湛へ、此方は淺く瀬になつて居ますから私共は其瀬に立つて糸を淵に投込んで釣るので御座います。見上げると兩側の山は切削いだ様に突立つて、それに雜木や赭松が暗く茂つて居ますから、下から瞻ると空は帶のやうなのです。聲を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣つて居ると森として居ます。

或日兩人は餘念なく釣つて居ますと、何時の間にか空が變つて、颯と雨が降つて來ました。ところが其日は殊によく釣れるので二人とも歸らうと言はないのです。太い雨が竿に

中る、水面は水煙を立て、雨が跳ねる、見あげると雨の足が山の絶頂から白い糸のやうに長く篠白を立て、落ちるのです。衣服はびしょぬれになる、これは大變だと思ふ矢先に、グイ／＼と強く糸を引く、上げると尺にも近い山籬の紫と紅の條のあるのが釣れるので御座います、暴れるやつをグイと握つて籠に押込む時は、水に住む魚までが此雨に濡れて他の時よりも一倍鮮かて新しいやうに思はれました。

『最早歸らうか』と一人が言つて此方を一寸向きますが、直ぐ又た水面を見ます。

『歸らうか』と一人が答へますが、これは見向きもしません、實際何を自分で言つたのかまるで夢中なので御座います。

其内に雷が直ぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思ふやうな怪しい音がして來たので、二人は物をも言はず糸を捲いて、籠を提げるが早いかドン／＼逃げだしました。途中まで來ると下男が迎に來るのに逢ひましたが、家に歸ると叔母と母とに叱られて、籠を井戸端に投げ出したまゝ、衣服を着更へ直ぐ物置のやうな二階の一室に入り小さくなつて、源平盛衰記の古本を出して畫を見たものです。

けれども母と叔母は對座で居ても決して笑ひ轉がるやうなことはありません。二人とも言葉の少ない、物案じ顔の、色彩の悪い女でしたが、何か優しい低い聲でひそ／＼話し合

つて居ました。一度は母が泣顔をして居る傍で叔母が涙ぐんで居るのを見ましたが私は別に氣にも留めず、たゞ一寸可憐いやうな氣がして直ぐと茶の間を飛び出したことがありました。

私は七日も十日も泊つて居たいので御座いますが、長くて四日も經ちますと母が歸らうと言ひますので仕方なしに歸るので御座います。一度は一人残つて居ると強情を張りましたので、母だけ先に歸りましたが、私は日の暮れかゝりに縁先に立つて居ますと、叔母の家は山に據つて高く築き上てありますから山里の暮れゆくのが見下されるです。西の空は夕日の餘光が水の様に冴えて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼い煙が谷や森の裾に浮いて居ます、何だか裏悲しくなりました。寺の鐘までが平時とは違ふやうに聞え、其長く曳く音が谷々を渡つて遠く消えてゆくのを聞きましたら、急に母が戀しくなつて、何故一緒に歸らなかつたらう、今時分は家に着いて祖母さんと何か話して御座るだらうなど思ひますと堪らなくなつて叔母に是から直ぐ歸ると云ひだしました。叔母は笑つて取合つて呉れませんが、其中に燈火が點く、従兄弟と挾將棊をやるなどする中に何時か紛れて了ひましたが、次の日は下男に送られ直ぐ家に歸りました。

又た母と一しよに歸る時など、二人とも出かける時ほどの元氣はありませんで、峠を越

す時、母は幾度となく休みます。思ひ出しますのは其時の母の顔で御座います。石に腰を卸してほつと呼吸を吐いて言ふに言はれん悲しげな顔容をします。其顔容を見ますと私までが子供心にも悲いやうな気がしまして黙つてつくねんと母の傍に腰をかけて居るので御座います。さうすると母が『お前腹が減きはせんか、腹が減いたら餅をお喰べ。出して上げようか』と言つて合財囊の口を開きかけます。私が『腹は減かない』と言へば、『そんなことを言はないで一つお喰べ、母親も喰べるから』と言つて無理に餅を呉れます。さうされますと、私は何故か尙ほ悲しくなつて、母の膝にしがみ附いて泣きたいほどに感じました。

『私は今でも母が戀ひしくつて戀しくつて堪らるので御座います』

盲人は懷舊の念に堪へずや、急に言葉を止めて頭を垂れて居たが、暫時して（聽者の誰人なるかは既に忘れ終てたかの如く熱心に）

『けれども是は當然で御座います、母が全然私のために生きて居ましたので、一人の私をただ無暗と可愛がりました。めつたに叱つたこともありませんが、たまさか叱りましても直ぐに母の方から謝罪するやうに私の機嫌を取りました。それで私は我儘な剛情者に育ちましたかと言ふにさうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら氣が弱くて女の

やうなところがあつたので御座います。

これが昔氣質の祖母の氣に入りません、やゝともすると母に向ひまして、

『お前が餘り優しくするから修藏までが氣の弱い兒になつて了ふ。お前からして今少し毅然して男は男らしく育てんと不可ませんぞ』とかう言つたものです。

けれども母の性質として如何しても男は男らしくといふやうな烈しい育て方は出来ないのです。たゞ無暗と私が可愛いので、先から先と私の行末を考へては、それを幸福の方には取らないで、不幸なことばかりを想ひ、一層私がふびんで堪らないので御座いました。

或時、母は私の行末を心配する餘りに、善教寺の傍に店を出して居た怪い賣卜者の所へ私を連れて参りました。

賣卜者の顔は能く憶えて居ります、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔容は薄氣味悪う御座いましたが母と話をする其言葉つきは大變に優しくつて丁寧で、

『ア、左様かな、それは心配なこと、御尤もく、能く私が卜て進ぜます』といふ調子で御座いました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗いて見たり、筮竹をがちや／＼いはして見たり、まるで人相見と八卦見と一緒にやつて居ましたが、やがてのことに、

『イヤ御心配なさるな、此のお見さんな末は必然出世なさる、よほど好い人相だ。けれど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に氣をつけてゆけば、必然立派なものになる』私の頭を撫でまして『む、好い兒だ』と繁々私の顔を見ました。

母は大喜びに喜びまして家に歸るや直ぐと祖母にこの事を吹聴しました處が祖母は笑ひながら、

『男は劍難の方が未だ男らしいぢやないか、この兒は色が白うて弱々しいから其て卜者から女難があると言はれたのぢや、けれども今から女難もあるまい、早くて十七八、遅くとも二十ごろから氣をつけるが可い』と申しました。

ところが私には其時(十二でした)最早女難があつたので御座います。

こゝまでお話したので御座いますから、これから私の女難の二つ三つを懺悔いたしませう。賣卜者はうまく私の行末を卜ひ當てたので御座います。

その頃、私の家から三町ばかり離れて飯塚といふ家が御座いましたが其處の娘におさよと申しまして十五ばかりの脊のすらりとして可愛らしい兒が居ました。

其兒が途で私を見ると必然我家に遊びに來いと言ふのです。私も初の中は行きませんでしたが餘り度々言ふので一度参りますると、一時間も二時間も止めて還さないで膝の上

抱き上げたり、頭にかぢりついたり、頭の髪を丁寧に搔き下して猶ほ可愛くなつたと其柔

かな頬を無理に私の顔に押しついたり、種々な眞似をするので御座います。

さうすると私はそれが嬉しいやうな氣がして、その後は度々遊びに出かけておさよの顔を見ないと物足りないやうになりました。

その中、賣卜者から女難のことを言はれ、母からは女難といふことの講釋を聞かされましたので、子供心にも、若しか今のが女難ではあるまいか、と甚く可恐くなりましたが、母の前では顔にも出さず、ない／＼心を痛めて居ながらも時々おさよの許に遊びに参りましたので御座います。

今から思ひますと、矢張そのころ私はおさよを慕うて居たに違ひないので、おさよが私を抱いて赤兒扱ひにするのを私は表面で嫌がりながら内々はうれしく思ひ、其温かな柔かい肌で押つけられた時の心持は今でも忘れないので御座います。女難といへば其時最早女難に罹つて居たといつても宜しう御座いませう。

母は毎日のやうに、女は可恐いものだといふ講釋をして聽かし、種々と昔の人のことや城下の若い者の身の上などを例に引いて話すので御座います。安珍清姫の事まで例に引きました。外面如菩薩内心如夜叉などいふ文句は耳にたこの出来るほど聞かされて、何

でも若い女と見たら鬼か蛇のやうに思ふが可い、親切らしいことを女が言ふのは皆なだますので、うかと其口に乗らうものなら直ぐ大難に罹りますぞよといふのが母の口癖でありましたので御座います。

私は母を信仰して居ましたから母の言ふことは少しも疑ひませんでした。それですからおさよも事に依つたら内心如夜叉ではないかと可恐がりながらも、自分で言譯を作へて、おさよさんは未だ子供だし自分も未だ子供だからそんな可恐いことはない、おさよさんが自分を可愛がるのは眞實に可愛がるので決して欺すのぢやあないと斯ういふ風に考へて居たので御座います。

ところが或日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び出して来て、私を無理に引張り込みました。そして何故此四五日遊びに来なかつたと聞きますから、風邪を引いたといひますと、其は大變だ、最早癒つたかと、私の顔を覗きこんで、未だ顔色が好くない、大事になさいよ、修さんが病氣になつたら私は死んで了ふと言つて熟と私の眼を見るので御座います。私は氣が弱う御座いますから斯ういはれますと何だかららしいやら悲しいやらツイ我知らず涙ぐみました、それを見ておさよは私を抱きかゝへましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもつて居るので御座います。そして今夜は泊れ母の代りに私が抱いて寢て

あがるからといひます。母上に叱られるから嫌だと申しますと、母上には私が今往つて歸つて来るから關はないといひます。其時私が、若し母上に言つたら猶ほ叱られる、おさよさんの所へ遊びに来るのも内證なんだからと小聲で言ひましたら、卒然私を突き離して、何故内證で来るの、修さんと私と遊んぢやア悪いの、悪いのなら最早来なくつても可う御座んすよと、可恐い顔をして私を睨みつけたので御座います。私は慄へ上つて縁側から飛び下り、一目散に飯塚の家から駈け出しました。

それからといふものは決して飯塚に参りません、おさよに途で逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見て何時もたゞ笑つて居ましたから、私は尙ほおさよが自分を欺しかけて居たのだと信じたもので御座います。

四

次の女難は私の十九の時御座います。此時は最早祖母も母も死んで了ひ、私は叔母の家の厄介になりながら、村の小學校に出して貰つて月五圓の給料を受けて居ました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母は其秋に亡くなりましたから私は急に孤兒になつて了ひ、終に叔母の家に引取られたので御座います。十八の年まで淋しい山里に居て學問といふ學問は何にも爲ないでたゞ城下の中學校に寄宿して居る従兄弟から送つて寄こす少年雜誌見

たやうなものを讀み、其他は叔母の家に昔から在つた源平盛衰記、太平記、漢楚軍談、忠義水滸傳のやうなものばかり讀んだので御座います。それですから小學校の教師さへも全くは覺束ないのですけれど、叔母の家が村の舊家で、其威光で無理に雇つて貰つたといふ次第で御座いました、母の病氣の時、母は呉れなくも女に氣をつけると、死ぬる間際まで女難を戒め、何卒早く立身して呉れ、草葉の蔭から祈つて居るぞと言つて死にました。けれども如何して立身するか、それは全然母にも見當がつかないので御座います。母は叔母の家から私の學資を出さうとしたらしう御座いました。これが都合よく參りませんのですから、私の立身を堅く信じながらも、たゞそれは漠としたことで、實は内々甚く心痛したものと見えます。それですから母としては唯だ女難を戒める外に私の立身の方法はなかつたので御座います。私は又性質意氣地が無いのかして自分の立身のことには如何いふものか餘り氣をかけませんでした。たゞ母に急に別れたので、其當座の悲しさ、一月二月に叔母の家に居ても如何かすると人の見ぬところをめぐり泣いて居りました。

月日の經つ内に悲もだん／＼薄らぎ、終には時々思ひ出す位のこと、叔母の親切にほだされ何時しか叔母を母のやうに思うて日を送るやうになつたので御座います。

十八の歳から、叔母の家を五町ばかり離れた小學校に通つて、同僚の三四人と共に村の

子供の世話をして、夜は尺八の稽古に浮身をやつし、此世を面白可笑しく暮すやうになりました。尺八の稽古といへば、そのころ村に老人が居まして、自己流の尺八を吹いて居ましたのを村の若い者が揃つて、大先生のやうにいひふらし、終に私も其弟子分になつたので御座います。けれども元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、たゞ無暗と吹くばかり、其内手が慣れて來れば、やれ誰が巧いとか拙いとか各自に評判をし合つて皆なで天狗になつたので御座います。私の性質でありませうか私だけは若い者の中でも別段に凝り固まり、間がな隙がな、尺八を手にして、それを吹いてさへ居れば慾も得もなく、朝早く日の昇らぬうちに裏の山に上つて、岩に腰をかけて曉の霧を浴びながら吹いて居ますと、私の尺八の音でもつて朝霧が晴れ、私の轉ばす音につれて日がだん／＼昇るやうにまで思つた事もあつたので御座います。

それですから自然と若い者の中でも私が一番巧いといふことになり、老先生までが眞實に稽古すれば日本一の名人になるなど、そのかしたものです。その中十九になりました。丁度春の初めのことで御座います。日の暮方で、私は例の通り、尺八を持つて村の小川の岸に腰をかけて、獨り吹き澄まして居ますと、後から『修藏様、』と呼ぶものがあります。振り回つて見ると武之允といふいかめしい名を寺の和尚から附けて貰つた男で隣村に越す

坂の上に住んで居る若い者でした。

『何だ。武之允山城守』

『全く修藏様は尺八が巧いよ』とにや／＼笑ふのです。この男は少し變物で、横着物で、随分人をひやかすやうな口振をする奴ですから『殿るぞ』と尺八を構へて囁す眞似をしますと、彼奴急に眞面目になりました。

『修藏様に是非見て貰ひたいものがあるんだが見て呉れませんか』と妙なことを言ひ出したので御座います。變に思ひまして、

『何だらう、私に見て貰ひたいといふのは』

『何でも可いから、たゞ見て貰へば可いのだ』

『どんなものだい、品物かい』と問ひますと武の奴、妙な笑ひかたをして。

『貴郎の大すきなものだ』

『手前はおれを愚弄なッ』

『愚弄のぢやアない、全く見て貰ひたいので御座んす。私のお頼だから是非見てやつて下さい』と今度は又大眞面目に言ふので御座います。

『宜しい、見てやらうから出せ』

『出せつて、今此處にはありません、一寸私の家へ来て貰ひたいので御座います』

『お家の寶、何とかの劍といふ品物かな』と私がいひますと今度は又た妙に笑ひ出しました。

『先づそんな物で御座います、何しろ寶にや相違ないのだから、ウンさうだ、寶で御座います』と手を拍ちますので私も不思議で堪りません、私の方からも見たくなりましたから、

『それぢやこれから一緒に行かう、サア行つて見てやらう』とそれから二人連れ立ちました、武の家に参りました。

前に申しました通り武の家は小さな坂の頂にあるので御座います。叔母の家からは七八町もありませうか、其坂の下に例の尺八の大先生が住んで居るので御座いますから私も坂の下までは始終参りますが、坂に登つたことは三四度しかありません。この坂を越しますと狭い谷間でありまして、其處に家が十軒とはないのです。だから此坂を越すものは村の者でも澤山はないので御座ります。武の家は一軒の母屋と一軒の物置とありますが物置は何時も戸が締切つてあつて其上に帷から大きな桎の木がおつかぶさつて居ますから見るとして陰氣なので御座います。母屋も廣い割合には人氣が無いかと思はれるばかり、シンとして居るのです、家に相對つた塹の下に四角の井戸の淺いのがありまして、いつも清水

を湛へて居ました。總體の様子が如何も薄氣味の悪い處で、私は此處に来て、武の家の前を通る度に直ぐ水滸傳の麻痺藥を思ひ出し、武松がやられました十字坡などを想ひ出した位です。

それですが、武から妙なことは言はれて大に不思議に思つて居る上に武の家に連れてゆかれますので、坂を上りながらも内々薄氣味が悪くなつて來たのです。途々武に何をさせるのだと聞きましても、武は如何しても言はないばかりか、メたといふ顔容をして根性の悪い笑ひ方をするので御座いました。

日は全然暮れて、十日頃の月が鮮に射して居ましたが、坂の左右は樹が繁つて居ますから十分光が届かないので御座います。上りは二町程しかありません、直ぐ武の家の前に出ました。家の前は廣くなつて樹の影がないので月影が判然と地に印して居ました。

障子に燈火がぼんやり映つて、家の内はひっそりとして居ます。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、外で躊躇つて居ますと、

『お入りなされ！』と暗い處で武が言ひました。

其聲は低いけれども底力があつて、何だか私を命令するやうでした。

『此處で見てやるから持つて來い』と私は外から言ひました。

『お入りなされと言ふに！』今度は猶ほ強く言ひましたので私も仕方がないから、のつそり内庭に入りました。私の入つたのを見て、武は上にあがり茶の間の次ぎに入りました。暫く出て参りません、其様子が内の誰かところそく話をして居るやうでした。間もなく出て参りまして、今度は優しく、

『お上りなされませ、汚ないけれども』といひますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の一間に入りますと、此處は案内小綺麗になつて居まして、行燈の火が小さくして部屋の隅に置いてありました。しかし先づ私の目につきましたのは其處に一人の娘が坐つて居ること御座います。私が入ると娘は急に起たらうとして又た居住ひを直して顔を横に向きました。私は變ですから坐ることも出来ません、すると武が出抜けに、

『見て貰ひたいと言ふたのは是で御座います』といふや女は突伏して了ひました。私は何と言つて可いか、文句が出来ません、呆氣に取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤らめて言ひ悪さうにして居ましたが、

『まア此處へ坐つて下さりませ、私は一寸出て來ますから』と言ひ捨て、行かうとしますから、

『何だ、何だ、私は嫌だ、一人残るのは』と思はず言ひますと、

『それでは坐つて下さらんのか』と言つて可^こ恐^{おそ}い顔をして私を睨^{にら}みました。私が歸るといへば直ぐにでも蹴^ひ飛ばしさらな見暮^{みぐ}すから私も仕方なしに其處に坐つて黙^{もく}つて居ますと、娘は泣いて居るのです。嗚^な咽^げびかへて居るのです、それを見た武の顔は眞^{まこと}實^{じつ}に例^{れい}へやうもありません、額^{ぬか}に青筋を立て、齒^はを喰^くひしぼるかと思ふと、泣き出しさうな顔をして眼をまじくさせます。何か言ひ出しさうにしては口の邊^{あた}を手の甲^こで摩^こるので御座います。『一體如何したのだ』と私も事の様子^{さま}が餘^{あま}り妙^たなので問^とひかけました。しますると武が啞^{ども}りながらかういふので御座います。妹が是非貴方に遇^あはしてくれと言つて聞^きかない、種^{いろ}々^く言^いひ聞^きかした^が如何^にしても承^お知^しない、それだから貴方^{あなた}を欺^{たぶ}して連^つれて來^きたのだ、何^ど卒^ぞか不^ふ憫^みな女^をだと思^{おも}つて可^こ愛^{あい}がつてやつて呉^{くれ}れ、私^{わたし}から手^てを突^ついて頼^たむからと、先^まづかういふ次第^{しだい}なのです。馬鹿^{ばか}々々しい話^わだとお笑^{わら}ひも御座^ませうが、全^{ぜん}くさうでしたので、先^まづ私^{わたし}が村^{むら}の色^{いろ}男^{をとこ}になつたので御座^まいます。

其頃^ま私は女^を難^がの戒^まを全^{ぜん}で忘^われた^たのではありませんが、何^{なに}を申^ますにも山^{やま}里^りの事^{こと}ですから、若^{わか}い者^{もの}が二^に三^{さん}人^{にん}集^あれば直^ちぐ娘^{むすめ}の評^ひ判^{はん}で御座^まいます。小^こ學^{がく}校^{こう}の同^{どう}僚^{りょう}も何^{なに}ぞと言^いへば何^ど處^{どこ}の娘^{むすめ}は別^{べつ}嬪^{ひん}だとか、彼^{かの}娘^{むすめ}には最^も早^{はや}色^{いろ}があるとか、そんな噂^{うわさ}をするのは平^{へい}氣^きで、全^{ぜん}くそれが一^{いっ}つ^ぱの樂^{たの}みなのですから、私^{わたし}も何^{なに}時^{とき}か其^{その}風^{かぜ}に染^そみまして村^{むら}の娘^{むすめ}にからかつて見^みたい氣^きも時^{とき}々^々起^おきたので御座^まいます、さすが母^{はは}の戒^まがありますから、浮^うとは手^ても出^でしませんでしたが、決^{けつ}して心^{こゝろ}から其^{その}實^{じつ}、女^をを恐^{おそ}れて居^ゐたのではなく、若^{わか}し可^い機^き會^{かい}があつたら必^き然^{ぜん}色^{いろ}の一^{いっ}つ位^ゐ出^で來^きる筈^{はず}になつて居^ゐたので御座^まいます。

ところで武^{たけ}の妹^{いもうと}はお幸^{さいち}と申^ましまして若^{わか}い者^{もの}の中^{なか}で大^{だい}評^ひ判^{はん}な可^こ愛^{あい}い娘^{むすめ}で御座^まいます、年^{とし}は其^{その}頃^{ころ}十^{じゅう}七^{しち}でした。私^{わたし}も始^{はじめ}終^{しま}顔^{かほ}を見^み知^ちつて居^ゐましたが言^い葉^はを交^ました事^{こと}はなかつたのです。先^ま方^{かた}では私^{わたし}が叔^{おじ}母^{はは}の家^{いえ}の者^{もの}であり、學^{がく}校^{こう}の先^{せん}生^{せい}といふ事^{こと}で過^あぐ度^どに禮^{れい}をして行^い過^あぎるので御座^まいます、田^{でん}舎^{しゃ}の娘^{むすめ}に似^にあはない色^{いろ}の白^{しろ}い、眼^{まなこ}のはつきりとした女^をで、身^み體^{たい}附^つは能^{あた}くおさよに似^にてすらしとして居^ゐました。城^{じやう}下^げの娘^{むすめ}にもあ^あの位^ゐなのは少^{すく}いななどと村^{むら}の者^{もの}が自^{おの}慢^{まん}さうに評^ひ判^{はん}して居^ゐたのですが、全^{ぜん}くさうだと私^{わたし}も過^あぐ度^どに思^{おも}つて居^ゐたので御座^まいます。でありますから、私^{わたし}も眼^{まなこ}の前^{まへ}にお幸^{さいち}を突^つきつけられて、其^{その}兄^{あに}から代^かつて口^{くち}説^{せつ}かれましては女^を難^がなどを思^{おも}ふ事^{こと}が出來^きなかつたのです。それに氣^きの弱^{よわ}い私^{わたし}ですから、よしんば危^{あや}いことゝ氣^きがつきましたところ、とても彼^{かの}の場合^{ばあひ}、武^{たけ}とお幸^{さいち}を振^ふり切^きつて逃^にげて歸^{かへ}るといふやうな思^{おも}ひつた所^{ところ}作^{しよ}は私^{わたし}には出^で來^きないので御座^まいました。

その後は私^{わたし}も二^に晩^{ばん}置^おきか三^{さん}晩^{ばん}置^おきには必^きずお幸^{さいち}の許^{もと}に通^とひましたが、極^{ごく}く内^{うち}證^{じやう}にして居^ゐましたから、誰^{たれ}も氣^きがつかせませんでした。それに兄^{あに}の武^{たけ}之^の允^{いん}が何^{なに}かにつけて被^か保^ほつて呉^{くれ}

ますし、又武の女房も初から能く事情を知つて居て、やはり武と同じやうにお幸と私の仲を巧くゆくやうにのみ骨を折つてくれましたので、私も武の家では公然と遊んだもので御座います。

二人の仲は武の夫婦から時々冷かされるほど好う御座いました。かれこれする内二三月も経ち、忘れもしません六月七日の晩のことです、夜の八時頃、私は平時のやうにお幸の許に参りますと、此晩は宵から天氣模様そらもやうが怪しかつたのが十時頃には降りだして参りました。大降りにならぬ内、歸らうと言ひ出しますと、お幸と武の女房が止めて歸しません、武は不在で御座いましたが、今に歸るだらうから歸つたら橋まで送らすからと申しますので暫時ぐづ／＼して居ますと、武が歸つて参りました。何處で飲んだか大ぶ酔つて居ましたが、私が奥の部屋に臥轉わたころんで居ると、其處へづか／＼入つて來まして、どつかり大躰おほむら坐をかきました。お幸は私の傍に坐つて居たので御座います。

『外方は大變な降りて御座りませ、今夜はお泊りなされませ』と武は妙に言ひだしました、と申すのは私がこれまで泊らうとしても武は、若し泊つたことが知れたら不味いからと何時も私を宥めて歸しましたので、私も決して泊つたことはなかつたのです。

『イヤ矢張り泊らん方が可からう』と私の言ひますのを、打消すやうにして武は、

『實は今夜少しばかり話がありますから、それでお泊りなされといふのだから、お泊りなされといふたらお泊りなされ』と語氣がやゝ暴らなつて参りました。舌も少し廻り廻る體で御座いました。

『話があるツて何だらう、今直ぐ聞いても可いぢやアないか』

『貴方氣が附いて居ますか』と出し抜けに聞かれました。

『何をサ?』私は判じ兼ねたので御座います。

『だから貴方は不可ません、お幸はこれになりましたぜ』と腹に手を當てゝ見せましたので私は喫驚して了つたので御座います。お幸は起つて茶の間に逃げました。

『眞實かえ、それは』と思はず聲を小さくしました。

『眞實かつて、貴方がそれを知らんといふことはない、だけれども知らなかつたらそれまでの話です、最早貴方も知つて見れば此後の方法をつけんぢやア』

『如何すれば可いだらう?』と私は氣が顛倒して居ますから言ふことが戰々して居ます、さうしますと武は可恐い眼をして、

『今になつてそれを聞く法がありますか、初から解りきつて居るぢやありませんか、貴方の方でも可ならなればかうと覺悟がある筈ぢや』

言はれて見れば尤もな次第ですが、全く私には何の覺悟もなかつたので、たゞ夢中になつてお幸の許に通つたばかりですから、かやうに武から言はれると文句が出ないので、私の黙つて居るのを見て、武は忌々しきやうに舌打ちしましたが、

『直ぐ公然女房になされ』

『女房に?』

『嫌で御座りますか?』

『嫌ぢやないが、今直ぐと言つたところで叔母が承知するかせんか解らんぢやないか』

『叔母さんが何といはうと貴方が其氣なら何でもない、貴方さへウンと言へば私が明日にでも表向の夫婦に見せます。何にも此處ばかりが世界ぢやないから、叔母さんや村の者がぐづぐづ言やア二人で何處へでも出てゆけば可い、人鬨一匹何をしても飯は喰へますぞ?』とまで云はれて私も急に力が附きましたから、

『よろしい、それでは兎も角も一應叔母と相談して、叔母が承知すれば可し、故障を言へばお前のいふ通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お幸は之れを承知だらうか』

『へん!そんな事を私に聞くがものは有りませんぢやないか、貴方の行くところなら假令

火の中、水の底と來まサア!』と指の尖で私の頬を突いて先の見暮にも似ず上機嫌なんです。

その晩はそれで歸りましたが、サア此話が如何しても叔母に言ひ出されないので御座います。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いて居ますし、母の死ぬる前にも叔母に女難のことは繰返して頼んで置いたのですから、私の口からお幸のことでも言ひ出さうものなら如何なに驚きもし、心配もするか解らないので御座います。次の朝から三日の間、私は今言はるか、最早切り出さうかと叔母の部屋を出たり入つたりしましたが、とうとう言ふことが出来なかつたので御座います。

叔母に言ふことが出来ないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃亡の支度をして武の家に出かけましたが、それもイザとなつて踏み出すことが出来ませんでした。と申すのは『これが女難だな』といふ恐しい考が、次第々々嵩つて來て、今までお幸の許に通つたことを思ふと『失策つた』といふ念が湧き上るので御座います。それですから若し、お幸を連れて逃げてもすれば、行先如何な苦勞をするかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちて了ふと、一念かうなりましては既落も出来なくなつたので御座います。

それで四苦八苦、考へに考へぬいた末が、一人ひとりに土地を逃げるといふ了見になりました、忘れも致しません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩で御座います。お幸に一日逢ひたいといふ未練は山々でしたが、此處が大事の場合だと、母の法名を念佛のやうに唱へまして、暗に乗じて山里を逃亡いたしました、其晩あたりは何も知らないお幸が私の來るのを待ち焦れて居たのに違ひありません。女に欺たぶされてはならぬとばかり教へられた私が何時か罪もない女を欺たぶすこととなり、女難を免れる積りで女を捨てた時は最早大女難にかゝつて居たので、其時の私にはそれが解らなかつたので御座います。

叔母の家から持出した金は僅か十圓で御座いますから東京へ着きますと間もなく尺八を吹いて人の門に立たなければならぬ次第となりましたのです。それから二十八の年まで是かけ十年の間の事は申上げますまい。國とは音信不通、東京には勿論、親族もなければ古い朋友もないので、種々様々の事をやつて参りましたが、何時も女のこととて大事の場合を失策しとくじつて了ひました。二十八になるまでは公然おもてむまの妻も一度は持ちましたが半年も續かず、女の方から逃げて了ひました。しかし其妻も私が本郷に下宿して居る中に其處の娘と出来あつたので御座います。

二十八の時の女難が私の生涯の終りて、女難と一緒に目を亡くして了つたので御座いま

すから、それをお話いたして長物語を切り上げることにいたします』

五

『二十八の夏で御座いました、そのころはやゝ運が向いて参りまして、鐵道局の雇となり月給十八圓貰つて居ましたが女には懲りて居ますから女房も持たず、婆さんも雇はず、一人で六疊と三疊の長屋を借りまして自炊しながら局に通つて居つたので御座います。

住居は愛宕下町の狭い露路ろぢで、兩側に長屋が立つて居ます中の其一軒でした。長屋は兩側とも六軒づゝ仕切つてありましたが、私の住んで居たのは一番奥で、直前すまへには大工の夫婦者が住んで居たので御座います。

長屋の者は大通りに住む方とは違ひまして、御承知でも御座いませうが、互に親しむのが早いもので、私が十二軒の奥に移りますと間もなく、十一軒の人は皆な私に挨拶するやうになりました。

その中でも前に住む大工は年頃が私と同じですし、朝出かける時と、晩歸る時とが大概同じで御座いますから始終顔を合せますので何時か懇意になり、終には大工の方から度々遊びに來るやうになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸の職人といふ氣風が何處までも附いて廻り、

様子がいなせて辯舌が爽かて至極面白い男で御座いました。たゞ容貌は餘り立派では御座
 いません、鼻の丸い額の狭いなどは殊に目につきました。笑ふ時は何處かに人のよい、恐
 く言へば少し抜けて居るやうな處が見えて、それが亦た此人の愛嬌で御座います。

私のところへ夜遊びに来ると、必然酒の香をぶん／＼させて、いきなり尻をまくつて
 坐をかきます。そして私が酒を呑まぬのを冷かしたもので御座います。

そして又た、頻りと女房を持てとすゝめました。其序に如何かいたしますと『君などは
 女で苦勞したこともない唐備木だから女の難有味を知らないのだ』とやるのです。御本人
 は如何かと申しますと、餘り苦勞をしたらしくないので、其女房も、親方が世話をして持
 たしてくれたとかいふので御座います。

けれども私は東京に出てから十年の間、種々な苦勞をしたに似ず、矢張り持つて生れた
 性質と見えまして、烈しい事も出来ず、烈しい言葉すら餘り使はず、見たところ女などに
 は近よることも出来ない野暮天に見えますので、大工の藤吉が唐備木で女の味も知らぬと
 いふのは決して無理ではなかつたのです。實際私は意氣で女難にかゝつたといふよりか皆
 んな、溫柔くつて野暮だから却て女難にかゝつたので御座います。

或夜のこと藤吉が参りまして、洗濯物があるなら喉に洗はせるから出せと申しますか

ら、遠慮なく單衣と襦袢を出しました。さう致しますと其翌日の夕方に大工の女房が自分
 で洗濯物を持つて参りまして、これだからお上さんを早くお持ちなさい、女房の難有味は
 これでも解らうと私の膝の上に持つて来たのを投げ出して歸りました。この女はお俊と申
 しまして年は二十四五で御座います。長屋中でお俊は何時も噂にのぼり、又お俊の前でも
 お上さんは如何見ても意氣だなどと、賞めそやす山の神がある位ですから私の目にもこれ
 は唯の女ではない位のことは感づいて居たので御座います。

藤吉は毎晩のやうに来るやうになりました。それは一ツは私から尺八を習はうといふ熱
 心であつたので御座いますが、笛とか尺八とかいふものは性質と見えまして藤吉は器用な
 男でありながら如何しても進歩いたしません。それでも屈せずブウ／＼吹いて居たので御
 座います。

お俊も遊びに来るやうになりました。初は二人で押しかけて参りましたが後には日曜日
 など、藤吉の居ない時は晝間でも一人で遊びに来て、一人で饒舌つて歸つてゆくやうにな
 つたので御座います。私も後には藤吉の家に出掛けて夜の十二時まで下らん話をして遊
 ぶやうになりました。お俊は頻りに私の世話を焼いて、飯まで炊いて呉れることもあり、
 菜が出来ると持つて来て呉れる、私の役所から歸らぬ中にちゃんと晩の支度をして呉れる

こともあり、それですから藤吉が或時冷かしまして、
 『お前は此頃亭主が二人出来たから忙がしいなア』と言つたことがあります。けれども藤吉は決して私を疑ぐるやうなことはなく、初はた隣り交際でしたのが、後には何でも身の上のことを打明けて私に相談するやうになりました。それですから私も其積りで交際つて、随分彼奴の力にもなつてやり、時には金の用までたしてやりましたので彼奴は私を又ない友と信じ、二日ばかり私が風邪をひいた時など一日は仕事を休んで私の傍に附いて居たことさへ御座ります。

それに長屋中、皆な私を可愛がつて呉れまして、溫柔い方だ良い方だ、珍しい堅人だと褒めて呉れるので御座います。ですからお俊ばかりでなくお上さん達が頼みもせぬ用を達して呉れるので御座います。ところが可笑いのはお俊がこれを嫉いて、何も私が附いて居るに餘計なお世話だと、お上さん達の目の前で嫌な顔をする、それをお上さん達は猶ほ面白半分私に世話を焼いたこともありましたが、けれども、それで以てお俊と私の仲を長屋の者が疑ぐるかといふに決してさうでなく、てんで私をば木か金で作つたものゝやうに無類の堅人だと信じて居たので御座います。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らさまに私に向つて

言つた山の神さへ居たので御座います。

實際、お俊は怪しいと言はれても仕方がありますまい。或晩のことに私が床を延べて居ますと、お俊が飛んで参りまして、

『どうせ私ぢやお氣に入りませんよ』と言ひざま布圍を引奪つて自分でどん／＼敷き、
 『サア、旦那様お休みなさい、オー世話の焼ける亭主だ』と言ひながら色氣のある眼元で熱と私を見上げましたことなどは、たゞの仕草ではなかつたので御座います。そして其時の私の心持を言ひますと、決して長屋の者が信じて居たほどの堅固なものでなかつたので、木や石でない限り、矢張り妙な心持がしたので御座います。

私が或時藤吉に向ひ『如何もお俊さんは意氣だ、まるで素人ぢやアないやうだ』と申しますと、藤吉にや／＼笑つて居ましたが『巧いところを當てられた、實はあれはさる茶屋で可なり名を賣つた女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞いて見ると堅氣の職人のところにゆきたいといふので、それこそ幸と私に世話して呉れたのだ』と少々得意の氣味でお俊の身元を打明けたので御座います。その時から猶更ら私はお俊の態度を妙に感じて來ました。

けれども先づ平穩無事に日が経ちます中、丁度八月の中頃の馬鹿に熱い日の晩で御座い

ます、長屋の者はみんな外へ出て涼んで居ましたが私だけは前の晩寝冷をしたので身體の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就きました。なんでも十時ごろまで外はがや／＼話聲が聞えて居ましたが其内だん／＼静になりお俊もおとなしく内に引込んだらしかつたので、私は眠られないのと熱苦しいとで、床を出まして暫く長火鉢の傍でマツチで煙草を喫つて居ましたが、外へ出て見る氣になり寢衣のまゝフイと露路に飛び出しました。露路には最早誰も居ないので、露路から通りに出ますと、月が傾いて丁度愛宕山の上にあるので御座います。外はさすがに少しは風があるので其處からぶら／＼歩いて居ますと、向ふから一人の男が、何かぶつ／＼口小言を云ひながらやつて参ります、其様子が酔ばらひらしいので私は道を避けて居ますとよろ／＼と、私の前に來て顔を上げたのを見れば藤吉で御座いました、

藤吉は私を見るやいきなり、

『イヤ大將、うめえところで遇つた、今これからお前さんとこへ、押かけるとこなんだ。サア家へ歸れ、今夜こそ己は勘辨ならんだ、如何してもお前さんに聞いて貰ふことがあるんだ』と私の手を取つてグイ／＼露路の方へ引張つて参るので御い座ます。

私も酔ばらひと思ひまして『よし／＼、サア歸らう、何でも聞かう』と一緒に連立つて

家に入りました。

藤吉の顔を見ると凄^{まじ}い程蒼ざめ眼が据つて居るので御座います。坐るが早いか『サア聞いて呉れ、私は最早如何しても勘辨ならんだ』と、それから捲舌で長々と述べ立てましたところを聞きますと、つまりかうなんです、藤吉が其日仲間の者四五人と一緒に或所で一杯やりますと、仲間の一人が何かの機會から藤吉と口論を初めました。互に悪口雑言を仕合つて居ます内に、相手の男が、親方のお古を頂戴して難有がつて居るやうな意氣地なしは駄^だつて引込めと怒鳴つたものと見えます。それが藤吉にグツと癢に觸りましたといふものは、これまでに朋輩からお俊は親方が手をつけて持餘^{もとあま}したのを藤吉に押つけたのだといふ諷刺^{おそくり}を二三度聞かされましたさうで、それを藤吉が人知れず苦にして居た矢先、又もや斯ういうて罵られたものですから言ふに言はれぬ不平が一度に破裂したので御座います、餘計なお世話だ、親方のお古なら如何した、手前はお古を貰ふことも出来まいと、我鳴りつけたものと見えます。さうすると相手はあざ笑つて、お古ならまだ可いが、新しいのだ、今でも月に二三度はお手が附くのだと惡^{わる}たれたので御座います。藤吉はこれを聞きませんが早いか『よし、見て居ろ』と直ぐ其處を飛び出して家に歸るとお俊をたゞき出して、了ふ了見でぶら／＼と歸る途中、私に逢つたので御座いました。

それでこれから直ぐにお俊を追出す積りだがお前さんも同意だらうと申しますから私はお俊が元親方と怪しい関係のあつた女であるか、ないか、そんなことは解らないけれど、今ではお前を大切に立派なお上さんになつて居るのだから追出すほどのことはあるまい、見たところでも親方と怪しいふ様子もないやうだ、それは私が請合ふと申しますと、藤吉『今でも怪しいなら打殺してやるのだ、以前の關係が有ると聞いたゞけて私は承知が出来ねえのだ、お俊を追出して親方の横面を張擲つて呉れるのだ、何ぞといへば女房まで世話をしつたといふ、大きな面をして無暗と親方風を吹かすからして最早氣に喰はねえて居たのだ、お古を押附けて置いて世話も何もあるものか、ふざけるない！』私が幾何なだめても聴かないでとうとう宅に歸つて參つたので御座います。

私も打捨つても置かれなないと、藤吉の後について行かうとしますと、關はないで置いて呉れると、私を内に入れませんが、仕方なしに外に立つて内の様子を聴いて居ました、お俊は最早床に就いて居た様子でしたが、藤吉は引ずり起して怒鳴りつけて居るので御座います、お俊は何も言はないで聞いて居たやうですが、暫時くしますとブイと外へ出て參りました。私を見て、

『下らないことを言つたらア、酔ばらひに取合つても仕方がないから打捨つて置ませう』

と言ひ乍らズン／＼私の宅に入るので御座います。私もお俊の後に附て宅へ歸りました。

『誰か下らないことを焚付けたのだらうねえ、眞實に仕様がなないねえ』とお俊はかう言つて、長火鉢の横に坐つて、其所に置いてあつた煙草を吸うて居るのです。

『明日の朝になれば何でもないサ』と私も爲事なしに宥めて居ましたが、お俊が歸りさうにもないので、

『静かになつたやうだから見て來たら可からう』と言ひますと、お俊は黙つて起つて出てゆきましたから、私は直ぐ蚊帳の内に入つて了つたので御座います。ところが間もなくお俊は戻つて參りました、

『能く寝て居るから外面から戸締をして來ました』と澄まして居るのです。

『そしてお前さん如何なのだ』と私は蚊帳の内から問ひました。

『私はかうして朝まで寝ないで居てやるのサ』

『そんなことが出来るものか、歸つて寝たが可からう』と申しますとお俊は焦つたさうに『打捨つて置いて下さいよ、酔ばらひだから夜中に又た如何なことをするか解るもんぢやアない、私や可恐ワ』と平氣で煙草を吸つて居るのです。私も言ひやうがないから黙つて居ますと、お俊も平時のお饒舌に似ず黙つて居るので御座います、蚊帳の中から透かして見

ると、薄暗い洋燈の光が房々とした髪から横顔にかけてぼーつとして居ます、夫に蒸暑いのでダラリとした様子が何時にない艶かしい様に私は思つたので御座います。

其内、かれこれ二十分も経ちましたらうか。お俊は折り／＼團扇で蚊を追つて居ましたが『オムひどい蚊だ』と急に起ち上がりまして、蚊帳の傍に来て『貴方最早寝たの？』と聞きました。

『最早寝かけて居るところだ』と私は何故か寝ぼけ聲を使ひました。

『一寸と入らして頂戴な、蚊で堪らないから』と言ひさま、やつと一人寝の蚊帳の中に入つて来たので御座います。

朝早くお俊は歸つてゆきましたが、如何いふ風に藤吉の機嫌を取つたものか、それとも酔が醒めて藤吉が逆戻りしましたのか、温順しく仕事に出て参りました。出際に上口から頭を出して『お早う』と言ひさま、妙に笑つて頭を搔いて見せまして、『いづれお謝罪は歸つてから』と、言ひ捨てゝ出て参りました。其後姿を見送つて『アゝ悪いことをした』と私はギツクリ胸に來ましたけれど最早追附ません。それからといふものは、お俊の亭主は眞實に二人になつたので御座います。

それから一月も経ぬ内に藤吉は又た親方に何か言はれて、ブン／＼怒つて歸つて参りま

したが、今度は少しも酔つて居ないのです。お俊と別れて自分は暫く横濱へ稼ぎに行くと言つた様子は甚く覺悟をしたらしいので、私も濱へゆくことは強ひて止めません、お俊と別れるには及ぶまい、暫く私が預かるから半年も稼いだら歸つて来て又一緒になるが可からうと申しますと、藤吉は涙を流してよろこびまして、萬事よろしく頼むと家を疊んでお俊を私の宅に同居させ、横濱に出かけて了ひました。

最早からなれば澄ましたもので、お俊と私は全然夫婦氣取で暮らして居たので御座います。さうすると一月程たちまして私は眼病にかゝつたので御座います。たいしたことあるまいと初めは醫者にもかゝらず、役所には力めて通つて居ましたが、駭々に悪くなりまして終には役所を休むやうになりました。醫者に見せますと容易ならぬ眼病だと言はれて、それから急に出来る丈の療治にかゝりましたが治る様子も見えないので御座います。

お俊はなか／＼氣を注げて看護してくれました。藤吉からは何の消息もありません。私は藤吉のことを思ひますと、あゝ悪いことを爲たと、つく／＼我身の罪を思ふので御座います。ですが、さればとてお俊を諭して藤吉の後を逐はすことを致す程の心は出ませんので、ただ悪い／＼と思ひながらお俊の情を受けて居りました。

その内だん／＼眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んで居るし、私は氣が氣でなら

ず、若し盲目になつたらといふ一念が起るたびに、悶え苦しみました。

こゝに怪しいことの御座いますのは、お俊の様子が甚く變つたことで御座います、何となく私を看護する舉動が前のやうでなく、つまらぬことに疝癩を起して私に難く當るので御座います。そして折り／＼は半日も何處にか出行いて歸らぬこともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は面白くなくつて堪りません。ところが或日のことで御座いました『御免なさい』と太い聲で尋ねて來た者があります。『入らつしやい』とお俊は起つてゆきましたが、暫く何か其男とこそ／＼話をして居ましたが、やがて私の枕元に参りまして『頭領が見えました、何か貴郎にお話したいことがあるさうです』

何の頭領だらうと思つて居ます中に、其男はづか／＼私の枕元に参りまして、

『お初にお目にかゝります、私ことは大工助次郎と申しますもので、藤吉初めお俊がこれまで種々お世話様になりましたにつきましては、お禮の申上げようも御座いません、別してお俊が厚いお情を被りました儀につきましては藤吉に代りまして私より十分の御禮を申上げます。就きましては、お俊儀は今日只今より私が世話することになりましたに就きましては早速お宅を立退ことに致します、左様悪からず御承知を願ひ置きます』と切口上てペラ／＼と饒舌立てました。私は文句が出ないので御座います。

それからお俊と頭領がどたばた荷ごしらへをするやうでしたが、間もなくお俊が私の傍に参りまして『種々事情があるのだから、悪く思つちやアいけませんよ、左様なら、お大事に』

二人は出て行きました。私は泣くことも叫喚することも出来ません、これは皆な罰だと思ひます、と母の箋れた姿や、孕んだまゝ置去りにして來たお幸の姿などが眼前に現れるので御座います。

役所は免められ、眼はとう／＼片方が見えなくなり、片方は少し見えても物の役には立たず、其内少しの貯蓄は無くなつて了りました。それから今の姿に零落たので御座いますが、今ではこれを悲しいとも思ひません、たゞ自分で吹く尺八の音につれて戀ひしい母のことを思ひ出しますと、いつそ死んで了つたらと思ふことも御座いますが死ぬることも出来ないので御座います。

* * * * *
盲人は去るに望んで更に一曲を吹いた。自分は殆ど其哀音悲調を聴くに堪へなかつた。戀の曲、懷舊の情、流轉の哀、うたてや其底に永久の恨をこめて居るではないか。
月は西に落ち、盲人は去つた。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。

欺かざるの記

七月（明治二十八年）

二十日。

佐々城信子嬢との交情次第に深からんとするが如し。戀愛なるやも知れず。

二十五日。

昨夜佐々城氏を訪ふ。十時まで談話す。今夜も亦た至る。

幽愁暗影の如く吾が心を被ふ。

二十九日。

昨朝佐々城信子嬢來宅ありて、一時間半許りを一秒時の如くに過ぎしぬ。嬢は釘店なる嬢が父のもとに所用ありて外出したる途に祕密を以て立寄りたる也。吾等は遂に祕密の交情を通ずるに至りぬ。之れ全く嬢の母豊壽氏が邪推よりして、遂に嬢と吾れとを驅りて故に至らしめたるなり。吾等は戀愛に陥らざるを得ざるに強られつゝある也。束縛は却つ戀て愛の助手のみ。

一昨夜嬢を送りたる來歎は吾をして泣かしめたり。嬢は眠り能はざる程に苦悶しつゝあり。神よ我等を善しきに導き給へ、清き高き深き強き愛戀に導き給へ。

信子嬢に向つて、公然言ふ可きか。お互は實は戀愛に陥りてある事を。

八月

一日。

わが生涯は更に別種の途に踏み入りたり。われ等は戀愛のうちに陥りぬ。

昨日、信子嬢來訪す。北海道生活の事は互に其の夢想を同じくしたり。吾れ等は明言こそせざれ、互に一生を通じて相携ふべしと約しぬ。

吾等が前途は夢の如し。吾等の前途は險路の如し。吾等は夢の如くに進まずして、一歩一歩、必ず此の險路を打ち越えざる可からず。

何の故に險難なるか、曰く、信子嬢の母は吾等の戀愛に反對なればなり。

昨日正午なり。信子嬢の來りしは。

一時半頃まで、一秒時間の如くに語り、相携へて芝公園に至る。嬢が歸路なれば也。勸工場に入りて買物す。出で、公園の内人影少なき處に至りぬ。樹下に憩ひて涼氣を取り、暫時語る。共に一日の閑旅行を約しぬ。曰く、八王子の方宜しかるべしと。あゝわれは嬢を得ざれば止まざる可し。母氏をして承諾せしめずんば止まざる可し。戀するならば全身全

心の熱血を注ぐ可し。

嬢は吾が著作の成功を待ちつゝあり。夜半まで務むる勿れと言へり。必ず病を得る勿れと言へり。されど吾が成功を待てり。

吾等が戀愛はすべからく公明正大にして大膽なるべし。何物も恐るゝ勿れ。陰影にかくす勿れ。日光にさらすべし。月夜に語るもよし。只だ二人語るべし。されどまた人の前に恥づる勿れ。

嗚呼一生！ 何ぞや。今日のわが戀愛も昔語りとなるの日あらん。吾等の愛も何時かは土塊のうちに入らん。

神の永遠の生命を信ずる能はずんば愛戀程儚きものはない。

嗚呼一生！ 前途の夢に迷ふ勿れ。今こそわが生命なれ。

信嬢より今夜書状来る。其の中に曰く、小妹はいま明らかにいふ。大兄と相對してかたふ其時は實に小妹の本心の現はるゝ時なり、何もかもうちあかして語る、誠によるこぼしき限りに御座候、家にありて種々な苦痛も小妹は常に大兄と相見る其時の樂みを思ひ出し自ら其時を待つべしと思ひよく心を慰められ候云々。然らば之れ已に戀愛に非ずや。

二日。

今朝信嬢來りぬ。八時十五分より十時まで語りて去りたり。嬢とわれとは最早分つ可からざる戀愛のうちに入りぬ。たゞ未だ互に其の戀てふ文辭を公言せざるのみ。此の次の對面には吾より公言す可し。最後の言葉を約す可し。

六日。

今朝のぶ嬢より來狀あり。筆末に曰く「片時もはなれず候君がおもかげ。」可憐の乙女、爾も終に戀に沈みぬ。よし。然らば、限りなき戀愛の泉をくましめよ。

われは今も猶ほ苦しみつゝあり。何をなす可き乎を知らざる也。吾れは幾度か詩人たり、文學者たるべしと思ひ定めぬ。されど、今は「傳道」を望むの心生じたり、一身然り、此の地上に於ける僅少なる一身の生命を傳道に費す可きを思ひぬ。

されど未だ其の何れにも定むる能はざる也。これ恥づ可きの事なり。吾れに吾を安からしむる信仰なし。神の眞理吾れに未だ明かならず。

何故にわれは自殺し能はざる乎。

われは自殺の罪なる可き眞理を解せざる也。故に罪なるが故には自殺せざるには非ず。

われに希望ある乎。曰く、なし。吾れに平和あるか。曰く、なし。苦惱のみあり。われは何事も面白きを感じず。

然らば何故に自殺し能はざる乎。死は萬事休す、最一の平和に非ずや。われに一個の鋭利なるナイフあり。以て胸を刺すに足る。

一擧手の事。十分に於て、或は五分にして足る。僅かに五分の苦痛。

わが父母、わが弟、わが戀人、わが友、すべて後より吾を追ふ可し。

彼等も遂にわれと等しかる可し。

僅かに數十年、若しくは數十年の遲速。

遅かれ速かれ、等しき運命。

ナイフ用意せられたり。何故にためらふか。

一擧手の勞。

眼をあげて見る。カール、テニソンの肖像、ア、彼れ等も已に死してある也。死國の民に非ざる乎。かの麥藁帽。之れ山口行一のかたみなり。彼れ今何處にある。死の國には友多し。友多し。行一も在り。武雄も在り。

一擧手の事。何故にためらうか。

嗚呼われはたゞためらふのみ、其の理由を知らざる也。

たゞ一個われを憤激せしむるものあり。曰く自殺は薄弱の行爲なり。平和を得ずんば、得

るまでは戦へ。希望なくんば希望生ずるまで苦戦せよ。自殺は薄弱の行爲なり。されど、

われ已に此の憤激を弾力なきまで用ひたれば、今は殆んどわれを立たしむるに足らず。

欺く勿れ。われは未だ眞面目ならぬなり。自殺もなし得ず。希望もなし。われは憐れの男

なり。あゝわれは世にも憐れの一人なり。自殺する事も能はず、さりとして希望もなし。苦

悶のみ、あゝ苦悶のみ、名づけ難き苦悶のみ。たゞ此の肉體を古びたる衣の如くにまよふ。

しかも脱ぎ捨つる能はざる也。

全世界をも征服せんとの大希望ありたる男子。立てよ。

馬鹿を言ふな。弱き事を言ふな。死する勿れ。斷じて死する勿れ。自殺する勿れ。無窮永

劫に生く可し。

立て、立て、立て。戦へ、戦へ。何でもよし何事でもたゞ爲す可し。宇宙は全體なり。自

たりとて、吾れは吾れ也。宇宙の外に出づるに非ず。

弱き事を言ふな。まけるな。立て。戦へ。爲せ。打て。殺せ。突け。蹴れ。何者か汝をさ

またぐる者ぞ。打て、殺せ、けれ、突け。

決して自から殺し、自から敗れ、自から退き、自から失望する勿れ。眞理を求めて止む勿

れ。

神の兒たらずんば止む勿れ。
裸體にして天地に立て。

十一日。

「曜日。記憶して忘るゝ能はざる日なり。」

本日午前七時過ぎ、信嬢来る。前日嬢と共に約するに一日の郊外閑遊を以てす。之れ寧ろ嬢より申出でたるなり。余之れを諾したり。而して、之れ互に或る目的を有したる也。嬢は此日を以て其心中の戀愛を明言し、余が決心を聞かんことを欲したる也。余も亦た此日を以て余が嬢に注ぐ戀情を直言し嬢の明答を得て、苦悶を輕うせんと欲したる也。互に默契したる此の閑遊は遂に今日實行を見るに至りぬ。されど勿論之れ秘々密々の事。嬢と共に車を飛ばして三崎町なる飯田町停車場に至る。着する時、恰かも汽車發せんとする時なり。直ちに「國分寺」までの切符を求めて乗車す。

「國分寺」に下車して、直ちに車を雇ひ、小金井に至る。小金井の橋畔にて下車して、流に沿ひて下る。堤上寂寞、人影なし。たゞ農家の娘、童子等を見るのみ。これも極めてまれなり。吾等二人、愈々行きて愈々人影まれなるところに至り、互に腕を組んで歩む。吾れ遂に昨夜よりの苦悶及び吾が信嬢に對する一切の情を打明けて語りぬ。

昨夜より 苦悶とは、昨夜われ國民之友校正のため、社樓に在りて竹越氏と雑談の際、談たま〜佐々城豊壽夫人の事に及び、而して竹越の曰く、豊壽さん今日吾宅を訪ひぬ。其の時の話の模様によれば、信子嬢を汐田某に嫁せしむる積りなるが如しと。此の言は極めて簡單なりしもわが心を刺せしこと、如何許りぞや。

吾れ自身も承知の事ならん。果して然らば信嬢は吾が愛を弄したる也。と苦悶、措く能はず、一言を載して信嬢に送らんと一度書きて捨て、再び書し了はりて、机上に置き、寢に就きたり。

今朝は信嬢に其の豊壽夫人の北行を上野に送り、上野より直ちに二人、飯田町の停車場に會することを約し居たれども、余前夜の事を思ひ且つ天曇りたれば、上野に行かざりし。信嬢上野より來り、閑遊を果す可きを促す。

すなはち、兎も角も、人なき自由の林に入りて吾が苦悶のありたけを打明けんと欲し、同意して吾宿所を出發したる也。信嬢は吾が腕をかたく擁して歩めり。吾れは一語々々、徐ろに語り、遂に戀愛するに至りし吾が心情を語る時、感迫りて涙をのむ。嬢も亦た涙をのむ。嬢の曰く、汐田某に嫁する云々の事は全く偽報なり。さる事はみぢんもなし。と、嬢は吾が愛よりも更らに切なる愛を吾に注ぎ居たる也。吾等堅固なる約束を立てたり。吾

等が愛は永久かはらじと。

余はブライアントの水鳥に寄する歌を語りて人生の永久の平和を語り、永生を語り、愛の無限ならざる可からざる事を語りぬ。

遂に櫻橋に至る。橋畔に茶屋あり。老婆老翁二人すむ。之に休息して後、境停車場の道に向ひぬ。橋を渡り數十歩、家あり。右に折る、路あり。此道は林を貫いて通ずる也。直ちに吾等此の路に入る。林を貫て相擁して歩む。戀の夢路！ 余が心に哀感みちぬ。嬢に向て曰く、吾等も何時か彼の老夫婦の如かるべし、若き戀の夢もしばならんのみと。更にみちに入りぬ、計らず淋しき墓塊に達す。古墳十數基。幽草のうちに没するを見る。吾れ曰く、吾等亦た然るべし、と。

更に、林間に入り、新聞紙を布いて坐し、腕をくみて、語る、若き戀の夢！ 嬢は乙女の戀の香に酔ひ殆んど小兒の如くになりぬ。吾に其の優しき顔を重げにもたせかけ、吾れ何を語るも只だ然りくと答ふるのみ。日光、綠葉にだけ、涼風林樹の間より吹き來る。回顧。寂又た寂。吾曰く、林は人間の祖先の家なりき。今は人、都會をつくりぬ。吾等は今ま自然兒として此のうちに自由なるべしと。

黙又た黙。嬢は其の顔を吾が肩にのせ、吾が顔は嬢の額に磨す。嬢の右腕、力なげに吾が來ません』

左腕をいだけ。黙又た黙。嬢の靈、吾に入り、吾が靈、嬢に入るの感あり。吾れ、頭を擧げて葉のすき間より蒼天を望みぬ。言ふ可からざる哀感起る。吾れ曰く、吾が心何となく悲し。されど悲しきは思ふに兩心相いだけ、其の極に起る自然の情なるべし。嗚呼悲哀の感は、吾が愛戀の情をして更らに眞面目ならしむと。嬢はたゞうなづくのみ。

林を去るに臨み、木葉數枚をちぎり、記念となして携へ歸りぬ。境停車場にて乗車す。中等室、吾等二人のみ。不思議に數停車場迄は一人の吾等の室に來るものなし。吾等は坐を並べて坐し、窓外の白雲、林樹、遠望を賞しつ、寧ろ汽車遅かれと願ひぬ。余が歸宅したるは五時半なり。(十二時過ぎ)

十二日。朝認む。

嬢は吾れに許すに全身全心の愛を以てすと云へり。されど嬢は一種の野心を有す。曰く女子の新聞事業。

其の爲めに嬢は合衆國に行くことになり居れり。故に嬢は曰く、吾等は已に一體たるべし。されど夫妻となりて一家に住むに至ることは何年の後たるを計り知るべからず。われ曰く、ヨシ、吾等は一家に住み得るに至るまで待つ可し。されど夫妻は夫妻なり。われ等は自己の野心のために戀愛をも犠牲にするは酷なり。吾等は何時までも待つ可し。たゞし、「待つ」

は「冷ゆる」の意味たらざらんことを望むと。嬢また曰く、われ若し戀愛に於て御身に失望せば、斷じて再び戀せじと思ひたり。されど今は互に心も打明けて知られ、之に越したる嬉しき事あらずと。われ曰く、余は御身との戀を成就せざれば措かじと思ひ定めぬ。如何なる事ありとも成就さす可し。戀せば將に死するまでと決心せりと。

かく互ひに語りしは未だ櫻橋に到らぬ前、一橋さびしくかゝる寂寞の場なりき。橋に立ち、流に上下を一日にみるを得。水流矢の如く、碧草のうちより走り、また碧草のうちに没し去る。

信嬢の美德は其の剛毅なるに在り、同時に温和なるに在り。

余曰く、吾等が戀は飽くまで純潔なるべし。高尚なるべし、堅固なる可し、大膽なるべし。此の四徳の一を缺く可からずと。純潔なる可きは、男女兩性の徳のために、高尚なる可きは、神に向ふ理想のために、堅固なる可きは、互ひの相いだく心のために、大膽なる可きは、世に對して恥づるなきために。

余曰く。御身若し北米に去らば、われは北海風雪のうちに投ぜん。吾等が戀の前途は「悲運」なり。されど「悲運」何かあらん。

汽車、林を貫いて急行す。窗外白雲深く、哀感交々起る。われ嬢に曰く、余のために一曲

を歌へと。嬢すなはち「故郷の空」を歌ふ。悲壯の調、實に斷腸の調なり。われ此の調に應じて悲歌一つ作る可きを約しぬ。嬢は唱歌の達人也。

嗚呼戀愛！ 戀愛！ 若したゞ地上五十餘年の内の生命の香に過ぎずとせば、嗚呼はかなき夢なる哉。吾等青年の時は忽ち去らん。一日再び來らず。あゝ神よ。吾等は永久の生命と愛の無窮を信ぜんことを望む。希くば人間地上の煩惱のために、愛の聖を破る勿れ。高、信、純の徳をたてよ。

嗚呼吾が前程は世の謂はゆる幸運に非ず。われは敢へて荒野の試みに遇はんことを願ふ。此のわれの戀愛は悲運なる哉。されどわれ戀愛の徳をして此の悲運に勝たしめんと願ふ。否な、悲運を以て戀愛の徳を高めんことを願ふ。たゞ此の時、祈る、嬢の愛、如何なる時にも、惑はざらんことを。戀愛も永生の信仰も、凡てこれ人間の痴情に過ぎずして、宇宙人生の眞相は冷刻なる不思議なりとせば、生命は分時も堪ふ可きものに非ず。されどわれクリストの教を信ぜんとするもの也。此の眞理を信ぜんとするもの也。

十二日。

心張りさく許りに苦し。戀愛に永生の確信伴はずんばこれ靈魂の地獄なり。今日午後、嬢を訪ひぬ。今夜、嬢と吾が前途の世難を思ふて悲哀幽愁に不堪。

青年の年代忽ち過ぎん。戀愛の香忽ちさめん。かく思ふ時靈の氷る心地す。悶き苦しむ。熱涙もて神に祈りぬ。嬢に一書を認めたり。

十六日。

夜十二時、神に祈りて曰く。全心全力を以て爲さしめ給へ、愛さしめ給へ。

今夜バイロンのチャイルドデハロルド中のローム (Rome) を讀み、「時」の不思議なる力に感じて涙眼にあふる。パインスの Ae Fond Kiss を讀みて泣く。

此の兩三日新體詩を得ること四五、獨歩吟、沖の小鳥等なり。昨朝のぶ嬢來宅。薄暮來狀、曰く發熱就床、明日來訪を望むと。今朝これを訪ひ午後五時まで居たり。

昨日午後五時頃辨三郎氏來る。收二及び尾間を伴ひて西洋料理を馳走し、新橋に送る。

十七日。

午後佐々城信嬢を訪ふ。今日は昨日に引きかへて發熱甚だしく、苦悶見るに忍びず。氷嚢を其の頭に加へ暫時看護す。午後四時歸社す。

歸社、歸宅の後、胸も張りさく計りに苦し。戀は苦しきものなる哉。されど吾が心のこれに由りて深遠高調に赴くを感ず。愛の消息は音樂の消息よりも強し。悲壯なり。わが心を苦しむるものは戀のみに非ざる也。天職に對する苦悶もある也。

嗚呼幻の如き世なる哉。苦しみ、悲しみ、もだえ、泣き、笑ふ。茫然として得る處なし。

自然の無窮は靈魂悶々の無窮を示すに非ざる乎。幻の如くに吾には見ゆ。

凡てを神の慈愛にまかせんことを願ふ。われは未來の信念なくんば生くる能はず。此の現今の地上の肉體の生命の活動受動は、地上ならざる肉體ならざる生命の、永久の光明に入るの源泉に非ざるならば暗夜の絶望なり。

二十日。

十八日九時頃のぶ嬢を訪ふ。熱度減じ、たゞ床上に横臥し在りたり。薄暮まで留まりて談話したり。午食を子安等と與にす。

十九日は發熱日ゆる如何あらんと案じて到り見れば、幸ひに發熱せず。午食前まで談話して歸りぬ。薄暮再び訪ふ。本支氏歸宅して在り。簾製の臥床に横になり、嬢は其のふちに傾かけ、本支氏は傍らの診察寢臺にて按摩にもませつゝ、かくの如くにして九時に至りぬ。吾等の手は幾度か堅く握ぎられたり。嬢は吾がために歌ひぬ。吾はたゞ語るのみ。木支氏は頻りに滑稽の談を投げて吾等を笑はしつ。余が去らんとする時、本支氏は限り居たり。嬢は庭に下りぬ。余は裏門より出でんとす。嬢は其の病餘の衰體をかゝへて送り來る、吾等二人、裏門に別れんとす。余嬢を抱きて曰く、速かに全快し給へ。嬢、余を抱きて答ふ

るに、キッスを以てす。余、門を出づ。嬢、立ちて暗きかげに其の體をかすかに現はす、余かへりみて禮す、さらば。嬢もまたかすかに、さらばと言へり。余が手にバイロンあり。余はバイロンを思ひつゝ、嬢との戀愛を思ひつゝ、車を驅つて家に歸りぬ。

本日は多忙にして終に訪ふ能はざりしも、心は片時も嬢を忘るゝ能はず。

二十三日。

十時頃、信嬢を訪ふ。不在。午食を彼處にてなし、假眠一番する時、嬢歸り來る。嬢は二回われを訪ひたり。

一昨日は殆んど終日嬢の家に在りたり。午前九時より午後十時まで。別れに臨んで、庭に送り、また彼の裏門まで！

われは嬢を教導せざる可からず。嬢の品性をして更に益々高且つ偉ならしめざる可からず。如何なる事ありとも嬢を疑はざる可し。されどわれ日夜、怪しき苦悶になやみつゝあるなり。あゝ嫉妬の魔鬼よ去れ。嫉妬は愛をして濁水たらしむるものなり。火宅たらしむる者なり。昨日は全然われ嬢を苦しめたり。口を以て舉動を以てこれを冷遇したり。あゝ可憐の少女、此のひねくれたる吾をゆるせ！ 昨夜嬢は例に依りて彼の裏門まで送りぬ。されどわれ一握手だに與へずして歸りぬ。

二十五日（日曜日）

嬢と同伴、一番町教會堂に出席す。歸路萱場三郎氏と三人、釘店なる佐々城本支氏の病院を訪ふ。晝飯を馳走になり。午後二時辭して三人共に吾が宅に歸りぬ。また相伴うて四國町なる嬢の宅にいたる。本支氏歸り來り、四人與に晩食を同うす。本支氏は直ちに釘店に歸り去りぬ。三郎氏九時頃歸宅するを嬢と共に送りて三田の通りに出で、三郎氏と別かれ、われは嬢と共に紙屋にいたり、嬢のために書翰紙を求めなどしたり。

明記し置く。それより直ちに歸宅（嬢の宅に）せんと相携へて歩みぬ。夫妻の如くにして。

余曰く、君は妻、吾は夫、たゞ未だ世間的にこれを公言せざるのみ。精神的に言へば夫婦なりと。嬢曰く、勿論なり。今夜のわが裝衣已に細君然たりと、相顧みて笑ふ。

公園に入り、ベンチに腰かけて語る。暗夜、風早く、頭上樹梢鳴り、天上雲走る。慘澹なる光景、吾等少しも頓着せず。低語、温語、二個の情人は正に戀愛の極に達しぬ。互ひに前途の難を語りて嘆息せり。流涕せり。而して爲す可き事を數へて慷慨せり。而して相抱けり。嬢は再び小兒の如くになりぬ、たゞうつら／＼と戀の香に酔ふて殆んど正體なからんとす。

吾等は悲哀の感に打たれ、また歡喜の笑をもらしぬ。夜更くるを恐れて公園を去り、

を家に送りて、吾は直ちに歸宅したり。驟雨襲ひ來りぬ。風急に天暗し。されど幸福の夜！ 何ぞ知らん、此の慘澹悲痛を極めたる天使は、吾等が前途のおも影なかも。

されど吾、嬢に曰く、吾等は必ず能くこれを凌駕し去らんのみと。歸宅すれば十一時半。

二十九日。夜記。

二十六日の夜より三日を經過したり。

此の三日の戀愛史を記すべし。戀愛史の外に記すべき事殆んどなし。二十七日の夜は不思議なるほど不平苦悶の夜なりき。

例の如くに訪問したり。されど十分談話するを得ず。吾が心には常に萱場氏に對する嫉妬の念あり。氏が嬢に對する動作の餘りにラヴ的なるを見るに忍びず、嬢が亦これに應ずる動作の餘りにラヴ的なるに不平の血わく。皆これ卑しき嫉妬の炎なり。以て自からことがす也。本支氏は所用にて歸宅せず。由て萱場氏留守居のため宿泊することとなり、夜更けて余歸路に就くや、嬢と萱場氏とは赤門まで送りぬ。余が魂は嫉妬の毒杯をのみぬ。昨夜(二十八日)は別に變りし事なし。朝は嬢來訪せり。楽しく語り、熱きキツスを以て別

かれぬ。

昨夜佐々城を出て、萱場と二人、芝公園の山に入り、ベンチに腰かけて大に北海道自立策を語りぬ。

今朝早く嬢を訪ひ、公園に導き、大に將來を談ず。第一、嬢は米國行を止めよ。第二、二人北海道に立脚の地を作らん。第三、しばらく東京に勉學せよ。第四、勉學の方針は余に一任せよ。

嬢悉く諾したり。吾等は楽しく別かれぬ。

今夜、嬢頗る沈思に陥りたる様子なりし。明朝其の理由をきく可し。

九月

八日 朝認む。

八月三十一日より今日に至るまで、過ぐる九日間に於てわが生涯の方向は全く一變せり。

北海道行を決したるは三十一日なり。

以後引き續きて種々の事起りぬ。信子嬢が萱場氏に對つて、われと信子嬢との關係を公言して氏の希望を斥けたるも此の間なり。

信子嬢が幽愁悲哀に陥り、離別の苦に泣き暮したるも此の時代なり。遠藤よき嬢が常に信子嬢とわれとの戀愛に同情して、一方に信子嬢を慰め、一方にわれと信子嬢と相逢ふもなほ人目を引かざらしめたるも此の間の事なり。われと信嬢と終夜語り明かしたるも此の間の事なり。北海道拓殖の事に付き參謀者たることを承諾し、萱場氏自らも吾等のラブを同情視したるも此の間の事なり。われ收二にわがラブを公言したるも此の間の事なり。徳富氏に公言したるも、竹越氏に公言したるも此の間の事なり。

月明に乗じ深更に至るまで、佐々城氏の庭園に信子嬢及び遠藤よき嬢と共に、柳樹蔭に籐臥床を置きて談笑したるも此の間の事なり。

徳富氏はバイロン詩集を送りぬ。社中は不思議の思ひをなせり。鹽原行(信嬢)の計畫も此の間になりぬ。

嬢は殆んど悲痛の様、傍らに見る日も哀れなるに至りぬ。人なければ泣くのみといふ。六日午後、豊壽夫人を上野に迎へたり。豊壽夫人の歸京はわれ等親話の自由を奪ひぬ。嬢よ。此の普通をはなれたる青年に全心の愛を捧げたるは不幸なる哉。嬢よ、吾を許せ、

あゝ吾を許せ。

嗚呼神よ。此の足らざる吾をも全心を以て愛する可憐の少女を常に守り給へ。更に祈る、

吾等二人の望、喜、光、は互ひの愛なり。益々清く且つ高く、且つ堅固ならしめ給へ。

十日。

靜に此の一身を顧みれば實に責任の重きを知るなり。

人生は眞面目なり。

神は吾に豫言者の火を求む。

わが愛は自由を求む。

われに全身の愛を捧げたる少女あり。

われ北海風雪のうちに沒せんと欲す。

われの後に父母一族あり。

われの傍にわれを頼む青年あり。

一身の生死失落存亡は恐るゝ處に非ず。あゝ神よ。われをして世人のために、此の國の爲めに、此の世の爲めに、此の五十年を費さしめよ。土地を得て何かせん。富を得て何かせん。此の地球上の生命は唯々靈の修練のみ。

十三日。

昨日(十二日)午前、收二及び尾間氏に送られて上野停車場に到り、六時半發の汽車にて

發す。

那須停車場より車にて鹽原に向ひぬ。鹽原は古町會津屋なり。未だ古町に達せざる半里許りの處にて、信嬢に遇ふ。車を下り、信嬢と共に歩みぬ。吾等の位置の容易ならざる事を語り、大に覺悟して決して惑はず、益々高潔親切を期し、一には湖處子君等をして吾等のあとを追はしめ、一には世の瞻仰する處となる可きを言ふ。互に感激して涙をのみぬ。

會津屋に着し、夜半語りて盡きず。前途を語り、人道を談じ、遂によき嬢、信嬢と三人、聲を呑んで哭するに至りぬ。

佐々城氏突然來り、遂に吾等が今日までの愛史を打ち明けて語らざるを得ざるに至りぬ。われはありのままに語りぬ。

豊壽夫人より信嬢のもとに一書飛來せり。吾讀んで思はず寸斷したり。あまりに吾等を邪推して殆んど人を誤解するの極、吾が面上三斗の泥を塗られたるの感あり。憤激措く能はず。本支氏外出の後、痛哭す。二嬢の交々慰むるによりて僅に怒情を抑ふるを得たり。

本支氏は吾が凡てを聞きて夫人と相談して後に決答すべしと答へたり。われ豊壽夫人と相談する爲めに一先づ東京に引き回へす事に定めたり。

今朝二嬢と共に散歩して源三位洞窟及び八幡宮に詣りぬ。憂愁痛憤、一變して奮激、決闘、

希望、光明の感にみたまされたり。

十五日。

夜認む。

昨日(十四日)本支氏、信子嬢及び余を呼びて人なき處に至り、曰く、吾等二人の約束はこれを承認す。元來を云へば、豊壽氏こそ信嬢の母ゆゑ、十分此の事には權力ある人なれども、若し四人車を並べて歸京歸宅せば自然と人目を惹き、かくては人の口もうるさき故、今本支自ら母の權をも代表し、責任を帯びて此事を認定す云々。

故に豊壽氏若し苦情を鳴らさば責は本支氏に在るなり。吾等二人の喜び如何。直ちに本支氏に對つて、感謝したり。本支氏は午後二時過ぎ發の汽車にて歸京するとて午前十時會津屋を出發したり。

本支氏は余をして猶滞在せしめたり。

午後三時より信子嬢と共に散歩に出掛けたり。遠藤よき嬢は氣分悪しとして留守居せり。吾等二人手を携へて源三位洞窟の茶屋を訪ひ、それより尙ほ溪流を廻りて橋を渡り、淋しき谷に至りて止む。秋晴幽谷、太陽滿山、人影絶莫、此の時此の境に愛戀の二人相携へて朝の歡喜を胸にたゞみつゝ歩む。何の不足する處ぞ。一座のバラダイスなり。

今日午後三時少しく前より三人相携へて散歩す。此の度は谷を上りて更に遠きに到る。眼下夕陽山村に満ちたり。静景幽景。カーム、エンド、フリー。行く／＼秋草花を集む。

信子、よき子二嬢は野花を探て頭髮に挿しぬ。

十八日。夜。

吾今北海道室蘭港の宿樓にあり。

十六日午後三時會津屋を出發せり。離別の悲哀、涙をしぼりぬ。信子嬢の悲嘆見るに堪へず。

信子嬢よき子嬢送りて福波の先まで来りぬ。われ強ひて去らしめ車にのぼりぬ。嬢等泣く。吾亦車上にハンケチをぬらしぬ。顧みれば二嬢立ち止まりて手巾を振りつゝあり。山をめぐりて遂に見えずなりぬ。

那須停車場に午後七時二十分乗車。青森には、十七日午後四時到着せり。

十六日の夜發熱し、二嬢水をくみ来りて、頭及び喉を冷やし呉る。十七日夜汽車中にて發熱せずと心配したれども案外に安眠するを得たり。十七日終日、東北の野を窓外に望んで馳す。野馬の夕陽に立つなど吾が眼には珍らし。

青森にて中島屋に投じ、午後十時出帆、函館に向ふ。睡眠の中、函館に着す。吾が眼はじ

めて北海道を見たり。午前八時出帆、室蘭に向ふ。途中波高し。午後三時半室蘭に安着せり。丸一に投じぬ。

青森より一通、茲より一通、信嬢に發書。 收二に一通茲より發書す。

幽愁、憤激、無念の涙、離別の涙、希望の光、絶望の面影、人生不思議の幽懷、わが胸に往來せり。細雨霏々、夜寂寥。

二十日。

嗚呼吾少しも信嬢を忘るゝ能はず。

十九日― 午後四時札幌に安着したるが故に五時東京に向けて安着の發電をなし、且つ母の心如何と問ひ合せたり。其の夜、答なし。今日終に返電なし、餘りの事に思ひ豊壽氏夫人に問ひて信子嬢鹽原より歸りしか、直に返事を頼むてふ電報を發したり。時に午後四時。而して今は九時半、尙ほ返電なし。

信嬢來りて吾をたすけ、共に小屋に入りて開拓に従事する事に就きては、定めて彼の女の兩親の苦情多かるべしと信ず。信嬢は必ず能く之を打破するを疑はず。

昨夜信嬢、よき嬢、及び收二に書狀を認む。

今日薄暮實に人生の悲哀を感じたり。人間は何の故にかくまで醜態たらざる可からざる乎。

何故にかく苦心經營せざる可からざる乎。

何の目的ぞや。何の必要ぞや。何の爲めぞや。

今やわれ、語る可き親友なく、遠く戀人を思ふて相見る能はず。孤影落寞として天の一角にあり。且つ苦心慘澹の事に従事す。

人の深き靈を有するもの、誰れか此の生の何の意義たるかに思ひ及ばざるものあらむや。

されど吾、神の愛、永生の信仰、哲人の生涯などを思ふて無限の悲愁を追拂ひたり。

二十一日 朝。

ヒロイックなれ。無益の愁に苦しむ勿れ。

將に北海道に於てなす可き事をつとめよ。信子は今如何にしてある乎。其の母と衝突して苦みつゝあらざる乎。或は病重くなりしに非るか。尙ほ鹽原に在る乎。母の心解けざるが爲めに發電せざる乎。吾が一寸歸京し居ることを望み居らざる乎。

わが父母は今吾が北行に就て大に悲みつゝあらざる乎。其ため更に老衰を加へざる乎。凡てかくの如き心配悲愁、吾が心をして鉛の如く重からしむ。

されどヒロイックなれ。頭上神の愛護あり。凡て神にまかし爾は爾の事に従事せよ。

二十三日 朝。

信子嬢より電報來る。「父の手紙讀みて、われのが着くまで返事よこすな」。われ甚だ心配せり。

二十四日。

朝、道廳に出頭す。白仁氏に面談の結果、空知川河岸に出張することに定まる。道廳より歸るや、直ちに小川氏を訪うて相談する處あり。直ちに吉澤氏を訪ふ。吉澤氏在らず。信太氏を問ふ。午後高岡氏來訪、共に吉澤氏を問ふ。氏と相談の上にて一人出張することに決す。歸路新聞社に安部氏を問ふ。

リソコルンを読み夜に至る。

夜、信嬢及び本支君より來狀ある可しと思ひしに來らず。芳賀及び依田の二青年來訪。信子嬢に一通を草す。

願書を差出したる上にて、一先づ歸京し、大に相談する處ある可きに決す。

二十九日 安息日。

函館港旅館に於て認む。

我が生涯は愈々多端になりたり。

二十五日朝空知太に向つて發したり。空知太に於て雨中の北海道森林を見たり。三浦屋に

したり。信子に自殺を勧めたりと云ふ。われ之を聞いて驚かず。彼の女は感情の子なればなり。本文氏及びよき嬢、收二の手紙皆信子の亞米利加行を語る。吾全然不賛成なり。吾は信子の夫として之を許さず。且つ吾等一體の天職に對し、斷じて此の事あるを得べからず。

其の夜信子嬢の來書あり。全然これ彼の女の理性を失ひたる文字なり。彼の女は自殺を企てたりと云へり。其の書遺きを送りぬ。亞米利加に行くに決せりと云へり。よし、信子をして決心せしめよ。これ全然理性を失ひたる決心なる故吾之を許さず。

吾は直ちに歸京すべきに決したり。

二十八日朝七時二十五分、札幌を出發す。トルストイのライフを携へて。

汽車中、讀書と瞑想と、うたゝねとのみ。

豊壽夫人、及び信子嬢に告ぐ可き事を一々思ひ出すまゝこれを手帳に書きとめ置きぬ。

何故に吾等一體は北海道にて開拓せんとの決心をなせしか。何故に信子嬢の亞米利加行は、吾等一體が斷じて賛同せざる所なるか。わがこれに對する意見を開陳せんがために、信子嬢の苦悶を救はん爲めに。吾が一生の大事を決せん爲めに。成るも、破るゝも。爾、深く吾等の愛の意味を思へ。戀愛の意義を求めよ。

十月

二日。

麴町區富士見町なる吾が宅に於て認む。

一言一行、一舉手一投足の間に於てすら、習慣先入の薄弱、虛榮、不義、我慾は其の墮力的運動を起さんとす。已に其の運動を始むる時は、容易に停止することなし。故に決して輕々しく言動すること勿れ。これまた修練工夫を要する一事にぞある。

三日。

吾が告愛の前途は殆んど暗黒なり。されど吾等は貫かざれば已まじ。吾は如何なる事あるとも此の戀愛は貫かざれば止まざる可し。

最後まで戦へ。根氣の續く限り戦へ。昨夜本文氏を釘店に訪ひぬ。されど彼は全然余を解せざるなり。余を知らざるなり。

昨日午前信子嬢とよき嬢來宅す。信子嬢は米國行を主張す。されど吾、全然之を排したり。吾は暗迷を辿りつゝあるなり。

吾が心裡に信仰の光あるなし。吾が前途に希望なし。吾に薄弱あるのみ。

吾は凡てをさて措き、光を求めざる可からず、薄弱に打ち勝たざる可からず。希望を求めざる可からず。吾をして信子嬢を愛することを益々深からしめよ。父母を愛すること、弟を愛すること、友を愛することを益々深からしめむ。目下の吾には自然は死してあるなり。神は無意義なり。吾を知らず。人を見ず。たゞ暗黒あるのみ。嗚呼神よ！ 涙を以て祈る、感激して祈る。希くば吾が心に光をそよぎ給へ。吾は弱し。吾は暗し。救ひ給へ。

人生竟に何の意義ぞや。暗迷をたどる盲者の行列、これ人間の世界か。暗迷其の裡に光を舍むか。不可思議なる天地。不思議なる人生。吾が雲は暗し。

かゝやく秋の日も晴れし蒼天の深き色も今は吾に何の力もなし。吾が心はにぶりはてたり。吾が精神は疲れ果てたり。吾は人のうち尤も愚なるもの、悪しきもの、弱き者なるが如くわれに見ゆ。天も地も友も戀人も、われを捨てわれをあざける如く見ゆ。

吾が心は愛の一点の光もなきなり。さりとして、吾が心に他を愛するの念もなきなり。主義的精力もなきなり。吾はたゞ空となりたるが如し。吾は空也。

此の地上はたしかに樂地に非ず。罪惡と慘事との充滿する處なり。

余は今、現代の政治につきても、文學宗教に就ても何の趣味もなし。

遺囑を行くも何者も吾が注意も趣味も之を惹起することなし。

凡ての者、吾には無意義、無趣味なり。

凡て夢中にあるが如し。否な、夢の方寧ろ趣味あるを覺ゆ。

七日。

三日四日五日六日、忽ち數日を経たり。

吾等一體の事容易に落着せず。母氏豊壽は依然として頑固たり。

徳富君に依頼したり。未だ其の確なる見込を聞かず。

本支君に訴へたり。彼は流涕せり。去れど未だ母氏の心を解く程に盡力し呉れず。

遠藤よき嬢の母氏及び姉氏、吾等に非常の同情を表し、吾等の爲に盡力するを約しぬ。

八日。

朝、昨夜收二に托して徳富君より來狀あり。今にして、思ひ切らずんば男を下げる云々。想ふに豊壽氏はあくまで我を誤解し居るが如し。

彼の女は誤解、不情、頑固、虚榮より出づる決心を以て吾等に當る。願くば吾等をして、高潔なる戀愛、男女の信義、一生の體面より生ずる決心を以てこれに當らしめよ。

事若し全く破裂に了らば如何にす可きぞ。見よ天高く地廣し。爾の心靈は偉大なり。爾の

天職は重し。應に忍苦精勵すべし。世と絶ち友と絶ち、苦學修練せんのみ。
天われを召す。

今やわれ、諸々の感情亂れ起る。豊壽氏に對する遺恨憤怒、復讐的惡感。信子嬢に對する
深甚なる戀愛の哀情。天職に對する熱心なる奮激の情。
されど此の際、われは

- 一個の男子として、
 - 一個の天職ある男子として、
 - 一個の熱情あり、誠實ある男子として、
 - 一個の信義あり、同情ある男子として、
 - 一個の寛大にして温和なる男子として、
 - 一個、深き心靈の宿る男子として、
 - 一個の眞なる戀人として、
 - 一個、孝なる子として、
 - 一個、信愛なる友として
- 此の事を處置するの覺悟あり。

十一月

八日。

今朝徳富氏を訪ひ、左の書を得たり。

- 一、信子等謝罪書に由り豫て御申入に相成候結婚之儀は識認致候事。
- 一、同人等少なくとも一兩年間は府下を立退き候様御談被下度候也。
- 一、父母弟妹間の音信並面會は拒絶致し候事。右本人等に御談被下度候也。

佐々城 豊壽
佐々城 本支

明治二十八年七月

徳富 猪一郎殿

右の書を得たるまでの次第を左に録す。

四日の夜、潮田ちせ子老姉、丹野直信氏の二氏來宅ありて、大に勸告する處あり。潮田老
姉の曰く、佐々城にては遂に此の度の件を一任する由公言せられたり。就ては御身達も小
老に凡てを一任せよ。然らば兎も角も目出度結婚せしめむ。其の間信子は丹野若くは潮田
に寄宿すべし云々。吾之を排して受けず。曰く、御依頼申して、一任致したけれども、愈々

180

<p>大正三年十一月十五日印刷 大正三年十一月十九日發行 大正十四年九月廿五日百六版</p> <p>(定價五拾五錢)</p>	
<p>著者 國木 獨步 發行者 佐藤 義亮</p> <p>發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新 潮 社</p> <p>電話牛込 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 番番番番</p>	
<p>印刷所 東京市小石川區西江戸川町 電話小石川五九二一番</p> <p>富士印刷株式會社 印刷者 佐々木 俊一</p>	<p>印刷所 東京市小石川區西江戸川町 電話小石川五九二一番</p> <p>富士印刷株式會社 印刷者 佐々木 俊一</p>

記のるざか欺

如何にして結婚せしむてふ條件を知らし給ふに非ずんば信子をして去らしめ難し云々。
相談まともらずして二氏去る。
六日朝徳富氏を訪ふ。最後の談判を佐々城氏に試み、自から媒妁人となりて目出度く成就せしめやらんと申さる。依頼し歸り、佐々城氏へのわび書及び徳富氏への依頼書二通を徳富氏に送り置きたり。
今日遂に成就す。
十一日。
午後七時信子嬢と結婚す。
わが戀愛は遂に勝ちたり。
われは遂に信子を得たり。
植村正久氏の司式の下に、徳富君の媒介の下に、竹越與三郎君の保證の下に、潮田ちせ嬢の世話の下に、吾が宅に於て、父及弟列席の上、目出度く結婚の式を擧げたり。

↑(了)↓

縮刷獨步叢書

文豪國木田獨歩の全集也

(1) 武藏野及渚	『武藏野』は獨歩が始めて公にせる第一の文集にして不朽の名篇。『渚』は實に其絶筆也。
(2) 獨歩集	富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ヶ原より▼少年の悲哀▼夫婦等の最も多く、熱烈なる戀愛書簡集の觀あり。
(3) 獨歩書簡	運命論者▼巡查▼酒中日記▼馬上の友▼悪魔▼晝の悲み▼空知川の岸邊▼日の出等
(4) 運命	鎌倉夫人▼神の子▼少女▼帽子▼あの時分▼死▼波の音▼歸去來▼戀を戀する人
(5) 濤聲	竹の木戸▼窮死▲疲勞▼筋操▼二老人▼泣き笑ひ▼都の友へ▲入郷記▲眩の侮辱
(6) 第二獨歩集	『欺かざるの記』の前半にして若き獨歩が惱みと欣びを以て送迎せる青春の日の記録也
(7) 青年時代	獨歩が自ら筆を執つて其烈しかりしこと火の如き戀の終始を記せる高名の告白録也。
(8) 戀愛日記	獨歩の詩は實に我詩壇黎明の第一杵たりき其小品亦無韻の詩にして天才の閃光を看る
(9) 詩及小品集	

定一册七拾錢 ←送料六錢

獨步叢書第十編

獨歩病牀録

内容 ◇死生觀 ◇人物觀 ◇戀愛觀 ◇藝術觀 ◇雜觀

國木田獨歩が再び起つこと能はざるの病牀に於いて述べた、其の感想録である。是れ、死に恐怖あれども禱ること能はざる近代的作家の「死生觀」であり、戀に敗れて人生の悲劇を痛感せる人の「戀愛觀」であり、新作風の魁をなせる天才の「文藝觀」であり、あらゆる方面に興味を抱いて交遊最も廣かりし人の「人物觀」である。舌頭錐の如く鋭利に、言々悉く奇想を孕みて、警拔の文字隨所に拾ふことを得べく、これを貫ける一道の眞氣、直ちに人を撃つものがある。作家としての獨歩は世已に定評の存するところであるが、更に思想の人として如何の面目を有したか。此の面目あるか故に、作家として如何に異色を示したかを端的に語るものは、『病牀録』一卷である。附録には、彼が作品のモデル、その他創作上の内幕を語り、獨歩讀者の興味極めて多かるべき文字に満ちてゐる。

新刊 菊半截紙裝
定價七拾錢
送料六錢

代 表 的 名 作 選 集 目 次

第一	牛肉と馬鈴薯	獨歩	十六	別れた妻	秋江	卅一	啄木選集	啄木
第二	坊っちゃん	漱石	十七	はつ姿	天外	卅二	運命の丘	抱月
第三	蒲	團花袋	十八	お艶殺し	潤一郎	卅三	和	解直哉
第四	透谷選集	透谷	十九	俳諧師	虚子	卅四	末	枯万太郎
第五	春	(全二冊) 藤村	二十	煤煙	(全二冊) 草平	卅五	善心悪心	里見弴
第六	わが袖の記	一橋牛	廿一	子規	枕子規	卅六	俊	寛菊池寛
第七	たけくらべ	葉	廿二	選集	花	卅七	將	軍龍之介
第八	爛	れ秋聲	廿三	そ	の妹實篤	卅八	涓	滴鷗外
第九	平	凡四迷	廿四	旅	役者幹彦	卅九	泉谷	集武郎
第十	高野	聖鏡花	廿五	物言はぬ	顔未明	四十	蝙蝠の如く	生馬
十一	何處	へ白鳥	廿六	ふところ	日記眉山	四一	子をつれて	善藏
十二	今戸心中	柳浪	廿七	鱧	の皮小劍	四二	白秋詩歌選	白秋
十三	耽	溺泡鳴	廿八	女	役者俊子			
十四	明治詩歌選	六家	廿九	南小泉村	青果			
十五	戀ざめ	風葉	三十	少年	行星湖			

羽二重表紙・菊半截特製
價五拾五錢・郵送料六錢

志賀直哉	暗夜行路	祖父と母との不倫の關係に生を得た一青年の暗い運命の影を描いた	二五〇
久米正雄	破船	作者の痛切な極めた失戀の自傳小説で一面深刻なる心理小説である	二七〇
武者小實篤	彼の結婚と其後	作者自身の結婚を材とせる情熱切の戀物語と其後の生活の記録	二〇〇
菊地 寛	眞珠夫人	父の仇敵に嫁して其純潔を許さず遂に悶死せしめし其の終始を描く	一七〇
芥川龍之介	傀儡師	戯け三昧、地獄變以下十一篇。寶玉の光輝燦たる氣品高き名作の集	一〇〇
島崎藤村	家	質と量と明治文壇第一の大作にして、恐らくは不朽に傳ふ可きもの	一八〇
吉田絃二郎	無家	三人の兄弟の生活を材とし、人間愛の哀しみを抒べたる長篇小説	一〇〇
藤森成吉	若き日の悩み	多感の青年と島乙女との戀を中心となし若き日の悩みを描ける名作	一〇〇
加能作次郎	小夜子	若く美しくしき文學志望の女性性が誘惑に一步步々墮落し行く徑路	一〇〇
江馬 修	暗礁	戀愛、結婚、夫婦關係等の幾問題によつて起れる悲劇を描ける大長篇	一六〇
生田春月	相ひ寄る魂	全三卷。二千百枚の長篇小説。現下の新らしき日本の全局を描いた	五〇〇
吉屋信子	地の果まで	興味極めて多く而も藝術味豊かな名作にして吉屋女史の出世作也	二五〇

價定は右 送料は左 単位錢

有島武郎著作集

(各編増
版出來)

新潮社出版

(8) 或女 (前編)	(7) 小さな者へ	(6) 生れ出る悩み	(5) 迷路	(4) 叛逆者	(3) カインの末裔	(2) 宣言	(1) 死
一三〇 錢	七五	二〇〇	二〇〇	八〇	八〇	八〇	定價 八〇
錢八	六	六	六	六	六	六	送料 六
(16) ドモ又の死	(15) 藝術と生活	(14) 星座	(13) 小さな灯	(12) 旅する心	(11) 惜みなく愛は奪ふ	(10) 三部曲	(9) 或女 (後編)
一三〇 錢	九〇	一三〇	一五〇	二〇〇	一三〇	一五〇	定價 一七〇
錢六	六	六	八	八	六	八	送料 二〇

11111111

